

2021-2022 日本語・日本文化研修留学生報告書

日本語・日本文化レポート集

2022 年 9 月

東北大学高等教養教育・学生支援機構

言語・文化教育センター

目 次

現代における祭りの機能性とその意味

— 沖縄のエイサー祭りを事例として — 1

吳 倩儒 / NG See Yu Jenny
(香港・UOW College Hong Kong)

日韓漫画におけるメディアの違いとその影響

— K-webtoon と J-マンガを通して — 14

パク サンビン / PARK Sangbin
(韓国・水原大学)

ベトナム人学習者による日本語意見文の構造的特徴と主張の述べ方

— 日本人学生との比較において — 31

グエン ティエン ガー / NGUYEN Thien Nga
(ベトナム・ハノイ国家大学外国語大学)

日本文学翻訳における翻訳シフト

— 三島由紀夫「仮面の告白」露訳を中心に — 39

イスマイロフ カミル / ISMAILOV Kamil
(ウズベキスタン・ウズベキスタン国立世界言語大学)

現代における祭りの機能性とその意味

—沖縄のエイサー祭りを事例として—

吳 倩儒 (Ng See Yu Jenny)

(香港・UOW College Hong Kong)

はじめに

多くの研究者はエイサー祭りを研究する際には、戦前と戦後という区切りで行った。実際、戦後のエイサー祭りは既にもう最初のエイサーの姿とは全く別物と言えるほど大きく変化した。しかし、どのように変化したのか、なぜそのような変化を招いたのか、本レポートはその疑問を解明することが目的である。

エイサー祭りとは、沖縄の伝統芸能でお盆の年中行事である。毎年旧暦七月十五日から三日間行われる。

池宮（2015）に、エイサーの歴史が詳しく述べられている。念仏踊りや念仏歌は仏教のものでありながら、エイサーでは中国の儒教の影響を大きく受けていると論じている。一方、沖縄のエイサー祭りも、目的は無論、先祖の供養であろう。奥村（2012）は民俗芸能における伝統と宗教観念の再生に関する調査研究プロジェクトから沖縄のエイサー祭りの歴史と諸見里青年会が主催するエイサー稽古、またその様子について研究した。エイサー祭りというのは伝統を受け継ぐのも決して県外の人に見せるものではなく、あくまで自身の地域における旧盆の行事であると述べた。従って、長い歴史に渡り島人は島との連結が深いことは言うまでもなく、地縁と繋ぐに当然な一環と見なされ、沖縄の住民のアイデンティティーとも強い関係性があることは奥村の先行研究ですでに解明されている。

ところで、本レポートは戦前と戦後のエイサー祭りの変化に注目しているため、本論でエイサーの起源について考察するが、その前に簡単に戦後また現代のエイサー祭りの状況を述べたいと思う。研究方法としてはまず、歴史文献でエイサー祭りの歴史を調べ、その由来から発展の経緯、規模まで述べる。そして、戦前と戦後のエイサー祭りについての変化の原因を分析する。

1. 定義

1.1 祭りの定義

祭りというのは一体どのようなものだろう。娯楽要素が多く、花火大会のような賑やかで楽しいイメージが現代では一般的だと思われるかもしれないが、元々祭りは娯楽的性質のほかに、神仏また先祖に対する敬意を表したり、農業社会における最も大切な事である五穀豊穡を願ったりすることが目的であった。まず、各種の辞書が「祭り」についてどう定義しているか見ていきたい。「日本語国語大辞典」によれば、神仏・祖霊などに供物をささげたり、楽を奏したりして敬い、慰撫・鎮魂し、祈願感謝する。おまつりをする。「広辞苑」から見ると、記念・祝賀・宣伝などのために催す集团的行事も祭りと定義されている。一方、中国の代表的な辞書である「新華字典」によれば、「供奉鬼神或祖先：祭祖。祭天。祭祀。祭灶」と書いてあ

る。祭る対象は神仏、死者あるいは先祖だけではなく、鬼神の鬼も対象となっている。国によって、祭る対象は多少異なることがわかった。しかし、疑いなくエイサーは祭りの属性に当てはまる。上記の定義によれば、お盆行事としてのエイサー祭りは祭りといえよう。

1.2. 戦前と戦後の定義

本論文では主にエイサーの戦前と戦後の変化について論じるため、戦前と戦後の時間点を定義する必要がある。戦前とは第二次世界大戦が終結した 1945 年より前の時間を指す。次いで、戦後とは 1945 年 8 月 14 日以降の時間を指す。

2. エイサーの起源

なぜ、お祭りが遙か昔から既に存在し、未だに年中行事として扱われているのか。なぜ、時代とともに忘れられ、消えてしまう始末になる祭りがあきながら、まだ盛大に祝われている祭りが存在しているのか。例を挙げれば、中国を起源としている雛祭りは今の中国では既に途絶えた一方で、日本では三大祭りと言われるほど大切にされている。では、なぜお盆のエイサー祭りはまだ現代まで続いてきたのか、考察していきたい。

お盆を概要すると、中国西晋時代に「仏説盂蘭盆經」に記載され、「目連救母」の物語から始まった。釈迦の弟子の一人であった目連が、亡くなった母親が餓鬼道に落ち、苦しんでいることを知り、救いに行くことにした。読経など苦勞の末に、やがて助け出すことができたことから、現代のお盆には、念仏踊り、念仏歌などで、先祖を供養する行事となった。このように見ると、いうまでもなく、お盆は仏教の行事とみなすことが多いかもしれないが、果たしてそうだろうか。まず、エイサーの起源を遡る必要がある。久万田（2020）はエイサーの起源について以下のように三つの説があると指摘している。

① 池宮正治説

乾留 33（1768）の「親見世日記」には、那覇の街中で「辻念仏」や「仲島念仏」が行われることが記されている。「いずれも遊郭の辻や仲島の遊女を雇ったもので、恐らく歌三線による踊りであろう。」「遊女」の「念仏」という点から、「本来の念仏踊りから遊離して芸能化への道をたどっていた」と予想する。

② 知名定寛説

近世史料に見られる「似念仏」が、すでに風流化（芸能化）が進んでいたことを池宮と同じく推測する。今日のエイサーに近似する似念仏の挙行は十七世紀にまで遡る可能性があることを指摘している。

知名定寛『沖縄宗教史の研究』1994

③ 宜保榮治郎説

1603 年から 3 年間琉球に逗留した袋中上人によって、本島の浄土宗の踊り念仏が沖縄の那覇の地に伝えられた。チョンダラー（京太郎）と呼ばれる首里のアンニャ村に居住する遊行藝人集団に念仏歌を習い覚え、お盆の時に歌い歩くようになった。

宜保榮治郎『エイサー 沖縄の盆踊り』1997

前述の通り、エイサーに関する起源については諸説あるが、いずれにせよ、「仏」、「踊り」、「歌」といったキーワードが共通して見られる。言うまでもなく、仏教との関わりは深い。ただし、「仏説盂蘭盆經」についての真偽の議論があった。先行研究を提示する前に、まず真經と偽經についての定義を述べたい。大蔵經に収録されているお経を真經と呼ぶのに対して、大蔵經に収録されていないお経を偽經と呼ぶ。

韓泰植は、偽經とは、仏教人達が印度の翻訳經典よりわかりやすく、仏教を広めるために撰述された經である。それに、偽經は大衆民衆經典と呼ばれるほど民衆の日常生活のなかにあることと考える（韓 1996）。

大正大学綜合佛教研究所の高橋祐美によると、仏教学者や經録編者は翻訳經典のみが真經で、釈尊の教えを正しく伝えるものであると主張した。一方、偽經は經録の入録を許さず、厳しく検証して仏教界の主流から除こうとし続けてきた。しかし、実際は『父母恩重經』や『盂蘭盆經』などは多く読誦者を得、一般民衆への教化の対象となっていた。そしてこれらを基とする仏教行事なども民衆の間に浸透していったことも事実である（高橋 1999）。

上述の研究を踏まえ、中国の西晉時代（265-316 年）に、竺法護という僧人が『仏説盂蘭盆經』を翻訳した。そして、梁の大同 4 年（538 年）に同泰寺で盂蘭盆会の法会が営まれた。そして、6 世紀ごろに撰述された『荊楚歲時記』に中国での盂蘭盆会は盛んに行われた事が記載されている。要するに、6 世紀にお盆は存在していたことが明らかである。

つまり、エイサー祭り、沖縄のお盆の起源は先述の内容によれば、早くても 1603 年ということになる。6 世紀から 17 世紀まで、仏教及びお盆は、中国によって日本に伝来したことはすでに解明されており、明確な事実である。そして、日本本島に発展した浄土宗はエイサー祭りの始まりのきっかけとなった。しかしながら、『琉球芸能総論』には、エイサーが古琉球に遡ることができるかと述べてある（池宮 2015）。『朝鮮王朝実録』の『成宗実録』105 卷、成宗大王の 10 年（1479 年）の条にある、琉球に漂着した挑戦漂流民金非衣の報告によると、

七月十五日、諸寺刹幢蓋を造る。或は彩段を用ひ、或は彩絵を用ふ。其の上に人形及び鳥獸の形を作り、王宮に送る。居民、男子の少壮なる者を選び、或は黄金の仮面を著し、笛を吹き、鼓を打ちて王宮に詣る。笛は我が国の小 管の如し。鼓の様も亦我が国と同じ。其の夜大いに雑戲を設け、国王臨觀す。故に男女の往きて觀る者、街を填め邑に溢る。

このように述べられているが、エイサー祭りにおいて肝要な要素である念仏歌はこの報告に見当たらない。従って、古琉球に現れたこの「エイサー」はエイサーではなく、現代のエイ

サーの原型といえよう。そのため、エイサーの起源として古琉球に遡る事（池宮 2015）という説はまだ疑問が残っている。1603 年、浄土宗の憎人である袋中上人が明に行けず、琉球に逗留することになり、逗留した 3 年間の間に浄土宗を布教していた。袋中上人が渡来する前、仏教はすでに琉球に伝わっていたが、その難解な仏教はただ王族や貴族を中心に広がったため、一般大衆まで届かない状況だった。阿弥陀仏を信仰する浄土宗の教義では、称名念仏を何よりも強調した。つまり、観仏という精神作用を中心とする念仏から、身体感覚—特に口業—に関わる念仏へと転じられたと考えられる（溪 2019）。その上、浄土教はただ阿弥陀仏の名号を唱えれば、往生できる。浄土教を開宗した法然上人（1133-1212）が著した『選択本願念仏集』によると、以下の通り述べられている。

計也、夫速欲離生死、二種勝法中、且闍聖道門選入浄土門。欲入浄土門、正雜二行中、且拋諸雜行選應歸正行。欲修於正行、正助二業中、猶傍於助業選應專正定。正定之業者即是称仏名。称名必得生。依仏本願故。

はかりみれば、それすみやかに生死を離れんと欲はば、二種の勝法のなかに、しばらく聖道門を闍きて選びて浄土門に入るべし。浄土門に入らんと欲はば、正雜二行のなかに、しばらくもろもろの雑行を抛てて選びて正行に帰すべし。正行を修せんと欲はば、正助二業のなかに、なほ助業を傍らにして選びて正定をもつばらにすべし。正定の業とは、すなはちこれ仏名を称するなり。名を称すれば、かならず生ずることを得。仏の本願によるがゆゑなり。

この通りならば、現在のエイサー祭りに念仏踊だけではなく、念仏歌も含まれていることは袋中上人が布教していたときに、一般大衆に口称の念仏が伝わって広がったものだ。そして、行事にはチョンダラーという流浪芸能集団が念仏歌を歌って家を回った。従って、沖縄の地域の青年達がその念仏歌謡を覚え、旧盆のエイサーで歌われるようになった（久万田 2021）。例を挙げれば、「親の御恩」である。この念仏歌には、「浄土宗」や「浄土」の言葉が出ており、その意味は阿弥陀仏の名号を唱えて死者への供養をする「念仏」であったがゆえに、浄土宗の袋中の製作と考えられる（池宮 2015）。そのため、エイサー祭りについての起源説の中で、最も有力なのは③宜保榮治郎説だと考える。そして、彼らの研究を踏まえ、盂蘭盆、またお盆の宗教起源は印度の仏教と起点とし、中国の偽経の発展によって、「盂蘭盆経」が翻訳された。続いて、平安時代末期に、法然上人が開宗した浄土教の僧人である袋中上人によって、浄土教を琉球で一般大衆まで布教し、念仏歌を普及したため、エイサー祭りの形が定着したとまとめられる。

3. 戦前と戦後におけるエイサーの変化

さて、エイサーの歴史を遡ることで、エイサー祭りの趣旨と沖縄までの伝来経路が解明した。しかし、エイサーは戦後になって大きく変化したと指摘されてきた（池宮 1990）。時代につれ、西洋文化による現代文明開化の歴史、第二次世界戦争、そして 27 年間のアメリカの

占領地となった沖縄は、沖縄県民の芸能はおろか、生活、文化、政治などに大きな影響を与えた。ならば、このような背景で、戦前と戦後のエイサーはいかに変化したのか考察する。

3.1. 「孝」への捉え方についての変化

まず、「孝」への捉え方について、大きく変化した。昔のように、悲しい気持ちで先祖を供養するというお盆の過ごし方から、現代の大型イベントになり、雰囲気盛り上げて過ごすことも珍しくない。それでは、お盆またエイサーの「孝」というのはいかに認識されていたのか、見ていきたい。儒教の経書と言われる四書五経のなかで『論語』『孝経』がお盆の存在価値において宗教的だけでなく、教育面にも大きい役割を果たしたと考えられる。『孝経』では「生事愛敬，死事哀感，生民之本盡矣，死生之誼備矣，孝子之事親終矣。」と「孝」はどのように実現すべきなのか述べた（欒 2012）。『孝経』の喪親章に基づいて「生事に愛敬し、死事に哀感す。生民の本尽せり。死生の誼備はれり。孝子の事終れり」と書いている。つまり、親の死を悲しみ、悼み、弔うことによって、初めて孝子の親に対してなすべきことは完全に終了したということができる。要するに、親の死に対しては悲しまなければならない、追悼をしなくてはならない。そうでないと、親子孝を完全に果たしたと言えないのである。

一方、『論語』『泰伯』には、「孝」について「孝を鬼神に致す」と述べられている。日本の神道における鬼神の理解は、自然のものである。つまり、太陽の神天照大神、月の神月読命など、神というものの自体は自然から生み出され、人格化された。しかし、中国の鬼神への理解は、先祖の霊を指す（洪 2001）。そして、エイサー祭りも日本本土と中国のお盆と等しく先祖の霊を祭ることとなる。さらに、チョンダラーが伝承した念仏歌の中で、エイサーに歌われていた曲も多数ある。例えば、『親の御恩』、『継親念仏』、『仲順流れ』などがある。

『親の御恩』という念仏歌にも文献によってやや異なる歌詞があるが、意味はおおむね同じで、親の恩を消して忘れず、生きても死んでいても親孝行しなければならないという意味である。続いて、『継親念仏』における「孝」の表現は、教訓歌である。換言すれば、子供が親に対して親孝行する歌ではなく、親が子供に先祖供養の教えを受ける歌である。ちなみに、この歌はある継母を持つ子供が7歳の時に、亡くなった実母を探しに旅に出た。戻ってきたら、継母が子供に先祖供養を教え、子供が実母への思いも絶えぬまま祭りながら涙が溢れる。この歌の最後は、阿弥陀仏の功德を説く部分となる。そして、この二つの念仏歌に共通していることは、「孝」を強調することはいうまでもなく、それ以上に、念仏歌の中に書かれている歌詞には亡くなった親や先祖に対し、悲嘆の気持ちが表現されていることが多い。

つまり、従来の「孝」への認識は、悲しい気落ちを表すことが何よりも大事だとのことがわかった。しかし、現代のエイサー祭りをみれば、会場で泣く人はほぼいないではないだろうか。泣いている人がいるとして、その涙は先祖、また両親を亡くした悲しみのために流すのだろうか。この時点で、戦後のエイサー祭りの「親孝行」という機能は薄められたのではないだろうか。ならば、この「祭り」の言葉の意味も変わったと考えられる。前述の I. 定義において「祭り」の定義を述べた。各辞書によれば、祭りは悲しく挙行される死者を弔って祀る行事を指せば、供物・奏楽などをして神霊を慰め、記念・祝賀・宣伝などのために催す集団的行事とも言える（広辞苑）。では、戦後また現代のエイサー祭りの賑やかな雰囲気の中で行われて

いる事を形容しようとしたら、後者の方がふさわしい。この時点で、矛盾を感じる。機能性の側面から見れば、昔は最も大きな機能性であった「親孝行」から、芸能化したため、「娯楽性」や「文化交流」など種々の役割も果たしていると言える。果たして、これはまだ昔のエイサー祭りと言えるだろうか。

3.2 芸能化する伴う政治的意味

第二に、前述の論点にも繋がるが、その「機能性」について考えていきたい。まず、アメリカの統治時代から生み出された政治的な意味があった。エイサー祭りの機能性を大きく変えたきっかけは米軍による 27 年間の統治及びその基地設置である。1945 年 3 月末から 6 月末にかけて、沖縄戦という、日本軍と米軍の沖縄本島における激しい戦争が行われた。そして、1945 年 7 月、広島と長崎が受けた原爆投下によって、第二次世界大戦がようやく終わりが迎えた。しかしながら、悪夢は沖縄に残っていた。米軍は沖縄から去ることはなく、居残った。1945 年から 1972 年にかけて、27 年間アメリカの統治であった。1950 年の基地建設声明のあと、沖縄を日本から分離させ、アメリカが統治することが決定された。1952 年の「サンフランシスコ講和条約」によって日本と分離され米軍の直接統治となった（森田城田 2017）。基地建設のため、住民を各地に設けられた収容所へ送った。元の居住地に帰ると許可されても、基地の建設がもうすでに始まったところもあったため、帰れない住民も多かった。一方、1950 年に、米軍の統治の下、琉球との関係を良くするため、軍政府特別布告第 35 号「米琉親善日」を 5 月 26 日に発令した。その 2 年後、1952 年に米琉親善盆踊り大会が開催された。この盆踊りはエイサーのことを指す。暫く関係が良くなったと思いきや、1956 年に島ぐるみ土地闘争が島に広がった。同年、1956 年 8 月 26 日にコザ市（現在は沖縄市と呼ばれる）にて「エイサーコンクール」が開始された。これが現在よく知られている「沖縄全島エイサー祭り」の最初の名前となる。まとめると、米国の基地建設のことで、沖縄県民の不満をおこした。そして、仲介役である沖縄政府が米国と根回して文化交流を通して、関係を滑らかにしようとした。つまり、芸能には政治的な意味も含まれるようになった。しかも、政治的な意味の他に、その時の県民にとって、精神依存のようなものと等しかった。外部の圧迫からこの古くから伝わっている「集合的記憶」を蘇らせた。そして、島人達には「集合沸騰」つまり祭儀などにおいてみられる感情の解放・熱狂と、それに伴う一体感の形成や宗教感情の活性化（井上 2005）が生まれるという結果に至った。上記のように、27 年間のアメリカ統治を経験し、日本政府からの援助もほとんど受けられない時間を過ごした沖縄県民にとって、誰が味方なのか、この先はどうなっていくか絶望的な状態の中に、唯一託せるあるいは支えてくれるものは古きから伝えてきた琉球文化とその習俗である。地域毎に、異なる風俗が発生することは多いが、お盆行事のエイサーこそが、共通している習俗であった。

3.3 鑑賞性と娯楽性要素の重視

第三に、先祖への供養の機能のみのはずだった行事は、島の象徴的な夏祭りへ移り変わった。要するに、鑑賞性と娯楽性が加わった。第二次世界大戦後、それまで島の盆行事という文

脈でしか踊られなかったエイサーに、異なる踊りの場が生じ、都会型のイベントとなった（岡本 2005）。

アメリカの統治、日本本土との関係などで、困難な時期を過ごしてきた沖縄県民はこの島がなかなか助けられず、住民たちの心も疲弊している時に、自己アイデンティティまた島民意識が高まる。そして、この島を振興するために、古くから続いてきた伝統を再び復活させたい気持ちもあり、1956年の「エイサーコンクール」の後、「沖縄全島エイサーコンクール」が1977年まで行われた。この期間のエイサー祭りはコンクールの形を取り、地域の青年会の間で競争し合い、優勝を目指す祭りであるが、地域への帰属意識を引き出すための役割もあると考えられる。出場団体は隊形、技、構成人数、衣装とそれぞれの青年会らしさが審査基準とされている（沖縄市企画部平和文化振興課 1998）。そして、自分の青年会らしさを表現するため、衣装の色、青年会のロゴ、顔を白く塗って隊列を整えたり、観客と絡み合っ盛りが上がったりする役割を担当するチョンダラー（京太郎）の化粧も工夫している。つまり、先程言及した「沖縄全島エイサー祭り」は紛れもなく昔の先祖を祀る機能から一気に娯楽を提供するようなイベントと変わった。

一方、演目の多様化も戦後のエイサーの特徴である。前述のように、戦前エイサーの演目は主に親あるいは先祖を追悼するための念仏歌である。《親の御恩》、《継親念仏》、《仲順流れ》など戦前のエイサーの定番の曲である。しかしながら、戦後になると、徐々に、戦前の曲だけではなく、新たな民謡を取り入れることが広まっている。ここで、沖縄市青年団協議会により、沖縄市青年祭り第40回記念式典の中に、沖縄市のそれぞれ青年会が披露した演目について考察したい。この記念式典書誌には22団体の青年会が紹介されているが、その中に、創立年が不明となっている団体は4団体があるが、戦前から創立した2団体と戦後に再び成立した2団体を演目について、比較したいと思う。

《仲順流れ》、《唐船ドーイ》は歴史ある青年会でも新しくできた青年会でも確実に演舞される二曲であることがこの表が明確に示している。《仲順流れ》は戦前から既に定番の一曲であることはここに改めて強調する必要はないが、問題は《唐船ドーイ》、標準語に訳すと「中国船が来るぞ」という曲をなぜ終わりの前に演じなければならないのか、今後課題として研究が必要であろう。もう一曲は、中の町青年会においては、《月の浜辺》が歌われ、歌詞は非常に短い。しかも、中の町青年会だけこの曲を演じているようで、なぜこの曲を演目に入れるのか、いかに意味があるのかについて、現在の手がかりが少ないため、《唐船ドーイ》と同じく今後の課題として考察が必要と考える。

続いて、池原青年会の《秋の踊り》とは本来《道輪口説》と呼ばれ、組踊り「義臣物語」の中で使われるが、歌詞は完全に異なっている。ともかく、《秋の踊り》について更に分析していきたい。まず、歌詞としては非常に季節感が強い一首である。曲名の通り、秋の景色、紅葉、月、時雨など秋を象徴するキーワードが歌を貫く。しかし、なぜ秋の歌を演じるのかという問いは西暦と旧暦に関係ある。お盆の日付は概ね西暦の8月、時に9月に行われる場合もある。現代の季節感と昔のはかなり異なる原因は地球温暖化で冬の時間が縮み、暑い期間が長くなったためだ。従って、お盆に入るのはほぼ二十四節気の立秋のあとである。一見、暑い時期

に《秋の踊り》を演じることは不思議だと思われるが、本来の暦法によれば、道理があるわけである。

高原青年会	池原青年会	松本青年会	中の町青年会
戦前からあるが起源は不明	およそ 100 年前 詳細は不明	昭和 28 年結成	昭和 55 年中断 平成 22 年再結成
演目 仲順流り 久高節 崎山節 今帰仁節 海ヤカラ アヤグ いちゅび小節 テンヨー節 唐船ドーイ	演目 秋の踊り 仲順流り 久高マンジュウ主 スーリ東 泊高橋 トゥータンカーニー 今帰仁ぬ城 海ヤカラー 越来よー 稲しり節 佐敷乙女 島尻千鳥 谷茶前 里前とうよー あやぐ 唐船ドーイ	演目 いちゅび小節 仲順流り 久高節 テンヨー節 スーリ東 トゥータンカーニー 沖縄育ち ケーヒットゥリ節 戻り駕籠 唐船ドーイ	演目 月の浜辺 仲順流り 久高マンジュウ主 スンサーミー スーリ東 海やから 果報節 赤田首里殿内 あやぐ 唐船ドーイ

更に松本青年会では八重山出身の黒島英章が昭和 18 年ごろ（1943 年）に創作した《沖縄育ち》という演目があった。この歌の趣旨は沖縄島人の日常生活を描写し、沖縄の特徴的な物を歌詞に入れた。ディゴの花、クバという神木と呼ばれている植物などが例としてあげられる。このように、先祖供養の内容が見えず、普通の沖縄民謡がエイサー祭りに使用されていることがわかった。結論をいうと、現在、我々が楽しんでいるエイサー祭りは戦前のエイサーに比べれば多様性があり、お盆の重たい雰囲気を作るより、楽しく盛り上がる雰囲気を作ったり宣伝したりするためのイベントに変化したと言っても過言ではない。

一方、演目の多様性の次に、エイサーを演舞する目的は既にお盆だけに行われることが限らないことを強調したい。現在、お盆以外、結婚式、新居のお祝いで、エイサー余興依頼がある。日本のウェディング店であるファストウェディング（First Wedding）は日本東京の渋谷に位置する本店なのに、沖縄式のウェディングプランが提供している。そして、その沖縄式結婚式の紹介では、エイサーは元々お盆の時期に踊られる伝統芸能であるが、近年では踊り自体を鑑賞し楽しむ目的も強くなり、沖縄で行われる結婚式を始め、様々なイベントで披露されることが多くなったと書いてある。一方、沖縄式の結婚式に演舞されるエイサーは御慶の結婚式にたいして、ふさわしい演目を演じる。例を挙げれば、《かぎやで風》は定番である。このように、エイサーの演出場面はお盆だけ限らないで、鑑賞性の目的として踊られることが増える現象がある。

4. 変化の原因

上記の文献の分析に基づいて、本来のエイサー祭りまたお盆の最も重要な意義は「親孝行」であることは解明した。エイサー祭りの形成において、様々な宗教の思想から出来上がったことが顕著である。仏教の『目連救母』という物語を始まりとし、仏教が中国に辿ると、僧人によってその物語を利用し、中国式な思想を付け加えたという考えもありうるだろう。仏教の独善的出家という教えを放棄して儒教の「孝」を積極的に取り入れ、偽経まで創作したと欒氏は言っている（欒 2012）。従って、中国で偽経と呼ばれている『仏説孟蘭盆経』が翻訳された際、中国思想、儒教の教義ないし価値観は意識的にか無意識的にか、押し付けられたことも空想ではない。ところで、エイサー祭りの戦前と戦後の変化が生じた原因は果たして何故だろうか。

4.1 宗教の多様性よりの基盤の不安定

第一に、宗教の多様性があり、さらに、統一性が見えない。神あるいは特定のテーマやグループを対象とする祭りでは、祭る対象は絞られており、押し方もほぼ決まっている。従って、統一性はある。前述のエイサーの起源の歴史から考えれば、沖縄のエイサーは三カ所（インド、中国、大和）からその仏教、儒教と日本流の仏教によって作られたものと考えても良い。つまり、特定の宗教のものではなく、多宗教が融合した産物である。しかも、沖縄本島の宗教から始めた祭りではないので、外部に影響されやすいこともある。尚、お盆は神ではなく、先祖を祀る対象となっているので、あくまで個人家庭の行事になる。

ならば、女の子を対象とし、健康祈願を目的する三月三日のひな祭りはどうだろう。同じく家庭行事なのに、なぜ統一されているのか、なぜお盆のように地域によって大きく異なる習俗ないのか、それはひな祭りの起源は遡りやすく、宗教背景も単一であるためだ。古代中国の上巳節をモデルとし、奈良時代に中国の朝廷の節会「曲水の宴」を取り入れた上、日本古来の信仰と水に対する信仰が結びついた結果である（田中 2012）。もう一つ例を見てみよう。七月七日の七夕も日本全国で祝われながら、地域ごとに異なる習俗は大してなく、祭りの趣旨と行事もほぼ全国に統一されている。起源としては、中国の牽牛星と織女星の星合の伝説と技芸の巧みさを乞い願う乞巧奠の行事が輸入され、日本古来の棚機津女（織り神）の信仰と習合したもの。平安時代に習合された七夕の行事には、民間からとりいれた神の依代としての笹竹を宮中で飾り、願いごとを書いた短冊がかけられた（田中 2012）。統一されている祭りの共通点は、中国の発祥の祭り行事を取り入れ、そして大和宗教である神道の行事に加えた。従って、起源の経路が短く、直接であれば、統一される可能性も高まる結論にたどり着くことができる。

4.2 離島における地域差

しかも沖縄の地理的な要因に加え、地域によって異なる演目、踊りが発生することがある。つまり、沖縄におけるエイサー祭りの「地域差」が生じることはあり得る。平成 30 年のデータをみると、沖縄県は東西約 1,000km、南北約 400km の広大な海域に点在する沖縄本島を含め、合計で 160 の島々の県であるが、その中の 47 島は有人島である（沖縄県庁 2020）。また、沖縄本島と橋等で連結されているのは 11 島のみである。つまり、戦前であろうか、戦後の復旧

であろうか、現在に 21 世紀に至っても、島々間の交流は交通の制限があるため、島々を統一しがたい結果に至る。従って、交通が現代ほど発達していない 1603 年と戦後の頃に、各島の生活習慣によって、異なる習俗が生じやすいことも想像し難くない。結局、最も伝統的なエイサーはあるのか、という問いが頭から離れずにいたところ、岡本は、比嘉、平敷屋、屋慶名のエイサーは戦前から旧盆の習俗としてエイサーが踊られていると示唆した（岡本 1997）。

4.3 アメリカ統治における飴と鞭の管理手段

ではなぜ、文化交流で成功したのかを説明すると国際政治から述べなければならない。先進民主主義国を中心に、「人命の価値」の見積もる傾向と国際的な相互依存の重要性を明確に認識するようになった。（神谷 2009）つまり、戦前のように軍事的なパワーだけを持つことは、本当の意味で強いと言えない。他国との関係、経済などあるいはソフトパワーも近年に強調されるようになった。「強そうに見える側が時に弱いことがあり、その逆もある」（David A、1989）という言葉はまさにアメリカが沖縄を統治しているときに直面した状況である。アメリカは無論軍事力も権力も世界のトップレベルであると言っても過言ではない。にもかかわらず、経済、社会福祉、公共建設もまともに発展していない沖縄県に対して、最初来沖時の 1945 年、軍事的な力で日本政府を脅かし、1950 年代から沖縄県に基地の建設を進めた。このような行動は紛れもなくハードパワーを行使し、強引に自分の勢力を拡大し、そして 50 年代に起きたベトナム戦では、補給地として大きな役割を果たした。と言っても、強引に土地を奪ったことはいうまでもなく、県民の不満を呼び起こす。1956 年に島ぐるみ土地闘争はその一例であった。長く居続ける限り、ローカル地域との関係は円滑にしておかなければならない。文化、気候、環境、言語などもどれほどの軍事的な優勢があろうとも、力を尽くして奪ったり、自分のいい都合にしたりする事もできなからう。従って、アメリカと沖縄の外交を推進するために、軍事的な優勢ばかり使ってしまう、当地の住民との関係が悪化し続けたら、協力を貰えず、軍人達が当地での生活にも不便をきたす。結果的には双方も妥協する他なかった。

4.4 国際化

戦後、「国際化」という単語が非常に重要になっていく。そして、先進国の身分証明とも言える（鈴木 2017）。「国際化」の目的は戦後の国々の復興を支援するため、金融制度また貨幣の統一化、市場の統合などを通して、サポートしていたが、徐々に旅客機の普及化、各国家の間の密接な外交関係に伴い、人々が更に自由に簡単に外国に行けるようになった。そうすると、外来文化の衝撃と地元文化を守る意識も必然的に起きる。エイサーの場合は、元々島行事にすぎないが、県外にも披露するようになり、沖縄の宣伝の手段として考えられる。沖縄の魅力をより多くの人に知ってもらいたい、県外に生活している沖縄出身の人にもエイサーへの参加ができるようにしたい、など種々な理由で沖縄県外に活躍している団体が増えている。

「国際化」により、沖縄県民は更にエイサーを通して自己アイデンティティが高まったことが奥村の先行研究で提示された。その報告書には調査対象である諸見里青年会が主催するエイサー稽古、またその様子について考察した。そしてエイサー祭りというのは伝統を受け継ぐのも決して県外の人に見せるものではなく、自分地域の旧盆の行事であると述べた（奥村

2012)。一方、岡本は第二次世界大戦後、それまで島の盆行事という文脈でしか踊られなかったエイサーに、異なる踊りの場が生じ、都会型のイベントとなったと述べる（岡本 2005）。換言すれば、地元文化を守り続ける「保守派」か、国際社会に向け積極的に地元文化を外へ宣伝し、勢力また影響力を拡大する「革新派」だということである。そして沖縄のエイサーも、国際化に向けて積極的に取り組んでいる。10 月に開催される「世界エイサー大会」が最も適した例である。まず、マスコミの発達により、情報の発信は早く、幅広くできるようになった。テレビの中継、SNS での発信などでより多くの国内外の人々へ情報を広めている。沖縄県庁の平成 24 年度（2012 年）の世界エイサー大会の開催の認知度は 64%であった。TV・ラジオ、新聞等のマスメディアから情報を知ったという結果が多くを占めた（沖縄県文化観光スポーツ部 2013）。その他、国内で拡大しつつある現象もある。兵庫県、京都府、奈良県、滋賀県及び和歌山県にも琉球国祭り太鼓支部が設置され、他にもエイサー団体、クラブが多く存在する。

結論

エイサーの起源は 1703 年日本の浄化土宗に属する袋中上人により、琉球に伝来した。その後、念仏歌、念仏踊りが旧盆の時に京太郎から始まり、家を回って演舞するようになった。更に、歌われる念仏歌の歌詞に、十分に親孝行をすべきこと、また阿弥陀仏を称名し、念仏を唱えることが言及されている。最も頻繁に出てくるキーワードは「阿弥陀仏」、「悲しい」、「涙」などである。このように、先祖また失くした両親に対しては、悲しい気持ちで供養することの方が当時の価値観に相応しい。しかしながら、このような先祖供養を目的としていた盆行事は時代につれて、機能性が増え、変化した。

昔のように、悲しい気持ちで供養しなければならないことから、祭りを楽しむことの方が普遍的になっている。多くの国を渡り、伝来してきたエイサーは、国によって異なる価値観と宗教に影響された背景があるため、沖縄全頭に普及しても、離島の多い沖縄の地理的な原因もあり、地域ごとに独特なエイサーが演舞される。更に、戦後のアメリカによって統治された 27 年間に、基地を建設したいアメリカと土地所有者である沖縄県民のあいだに、土地の問題で激烈な紛争が起きたことが 50 年台にあった。双方の関係を悪化させないように、エイサーが利用された。そして、エイサー祭りコンクールは更に鑑賞性と娯楽性という機能性を強めた重要なきっかけであった。

コンクールの審査基準はエイサーの伝統性を保ちながら、斬新で新たなエイサーを求めている。その結果、それぞれの青年会はこの大会に優勝するため、技を極めるだけではなく、自分の青年会らしさを表現できる衣装、演目、隊形などをアレンジしてきた。徐々に、親孝行を強調する念仏歌だけではなく、季節感のある曲、民謡歌手により作られた創作民謡も演目に加わった。さらに、憂鬱なお盆と対照的な、結婚式のようなめでたい祝賀行事にも、エイサーが演舞される現象が現代にある。

そして、航空機が一般的に使われるようになったことで、国々間の交流は増加し、国内の人口流動性も激しくなった。同時に、デジタル化していく時代に、マスメディアの利用は激増し、世界中にテレビから SNS まで、このような新たな情報交換できる科学技術が普及したため、観光業の推進も容易にできるようになった。そのため、多くの人はエイサーの存在を知ること

ができた。従って、県外へ発展させに行った沖縄県民といい、実際にエイサーを見てこの芸能を宣伝したいと考える県外の人といい、エイサーを日本国内に広め、様々な地方で披露されるようになった。日本国内だけではなく、アメリカ、インドネシアなどにもエイサー団体が存在することのは世界エイサー大会のおかげである。

このように、エイサーは既に先祖を祀る機能性に限らず、宣伝、祝賀の祭りとしても行われることが現代の現象である。そして、様々な歴史と時代の変遷によって、芸能化し、沖縄県の象徴の一つとなったことも、明らかである。

参考文献

池宮正治 (2015) 『琉球史文化論』 笠間書院

岩本通弥 (1993) 「地域性論としての文化の受容構造論: 民俗の地域差と地域性」に関する方法論的考察」 国立歴史民俗博物館研究報告 第 52 集

岡本純也 (1997) 「民俗舞踊と地域アイデンティティ: 沖縄の民俗舞踊エイサーの事例」 一橋大学スポーツ科学研究室 PP. 59-62

岡本純也 (2005) 『シマの身体から沖縄の身体へ: エイサーを踊る身体の歴史』 一橋大学スポーツ科学研究室 巻 24 PP. 21-28

沖縄市企画部平和文化振興課 (1998) 『エイサー360 度: 歴史と現在』 沖縄全島エイサーまつり実行委員会

沖縄県庁(2020)「離島の概況について」(<https://www.pref.okinawa.jp/site/kikaku/chiikirito/ritoshinko/ritou-gaikyou.html>) (閲覧 2022/06/06)

沖縄県文化観光スポーツ部 (2013) 『戦略的リピーター創造事業報告書』(<https://www.pref.okinawa.jp/site/bunka-sports/kankoseisaku/kikaku/report/houkokusixyo/documents/01hiyousi.pdf>) (閲覧 2022/06/06)

奥村哲也(2012)「民俗芸能における伝統と宗教観念の再生産に関する調査研究プロジェクト: 沖縄県の「エイサー」の事例から」 名古屋大学大学院文学研究科教育研究推進室 6 巻 PP. 177-180

神谷万丈(2009)「ポスト 9・11 の国際政治におけるパワー変容と持続」 日本国際問題研究所 586 号 PP. 29-39

鈴木誠 (2017) 「経済における国際化とグローバル化」 経営論集 3 巻 4 号 PP. 1-8

高橋祐美 (1999) 「中国佛教における偽経について一考察」 『仏教文化学会紀要』 1999 巻 8 号 PP. 134-154

田中直美 (2012) 「和食-日本人の伝統的な食文化-8 行事と食文化」 農林水産省

宮島喬 (2000) 『講座社会学 7 文化』 東京大学出版会

韓泰植 (1996) 「韓半島で作られた疑偽経について」 『印度學佛教学研究』 45 巻 1 号 PP. 322-314

洪偉民 (2001) 「中元節・盂蘭盆会における「考」について: 中国江南地区の事例を通して」 『人間文化学研究集録』 10 巻 PP. 71-81

溪英俊 (2019) 「浄土教における念仏の諸相: 身体性を中心に」 『浄土真宗総合研究』 12 号 PP. 49-82

欒竹民・飯島典子・吉沅洪編 (2012) 『日中韓の伝統的価値観の位相: 「孝」とその周辺』 溪水社

David A. Baldwin (1989) Paradoxes of Power, New York: Blackwell, P.2

First Wedding <https://www.first-wedding.net/okinawa/okinawa-style/style10.html> (閲覧 2022/07/30)

日韓漫画におけるメディアの違いとその影響

—K-webtoonとJ-マンガを通して—

パク サンビン (PARK Sangbin)
(韓国・水原大学)

1. はじめに

現在、韓国と日本はいずれも漫画で有名な国として知られている。特に日本は「漫画王国」と呼ばれるほど漫画が発展した国だ。韓国も以前は日本の影響を受け、日本の漫画スタイルに似ていた。だが、現在両国の漫画が形は全く違う形態をなしている。韓国はインターネットサイトに連載するデジタル形式の「ウェブトゥーン」が発展し、日本は雑誌に連載する出版漫画が主流になっている。

もちろん韓国にも出版漫画は存在する。しかし、日本とは異なり、主に子供の教育のための漫画と日本で出版されている漫画を翻訳した単行本がすべてだ。紙媒体の漫画は衰退したといえる。一方、日本でもインターネット媒体である漫画は存在する。しかし、韓国のウェブトゥーンとは形式が異なり、主に出版漫画をスキャンしたものを上げるだけだ。

この二つの形態の漫画の違いは何であり、違いを持つ二つの文化が両国にどのような影響を与えるかを知ることによって文化流入の利点と問題点がわかる。それを通して、両国の文化交流を良い方向に模索したい。

1.2 主要 キーワード

漫画、出版漫画、ウェブトゥーン、電子漫画、文化流入

1.3 キーワードの定義

1.3.1 出版漫画

この研究で最も重要なキーワードの1つである出版漫画を定義しようと思う。出版漫画とは一般的に単行本として印刷される漫画を指す。もともとは単に漫画と呼んでいたが、インターネットで連載されるウェブトゥーンが登場し、そのウェブトゥーンと区別するために出版漫画という名称を使用するようになった。

現在の韓国の出版漫画は最初から単行本の形で出版されたり、新聞で連載される漫画や漫画雑誌で連載されている漫画、そして子供たちの教育のための学習漫画が単行本で出版される場合を出版漫画と呼んでいる。日本の漫画産業の中心は出版漫画である単行本と漫画雑誌が占めている。基本的に漫画誌を定期的に発行し、その中で人気のある漫画を単行本で出版している。本研究ではウェブトゥーンと反対の意味で使用する。

1.3.2 Webtoon

インターネットを意味する「ウェブ(web)」と漫画を意味する「カートゥーン (cartoon)」の合成語として、各種マルチメディア効果を動員して製作されたインターネット漫画をいう。単

に漫画本をスキャンしてそのまま掲載するオンライン上の漫画ではなく、映像と音源、フラッシュ技法などを利用した漫画形式で、インターネットとスマートフォンで見ることに最適化された漫画形式だ。

本研究でこの「ウェブトゥーン」という言葉は、NAVER、DAUM（韓国インターネットサイト）などの韓国インターネットプラットフォームで連載されているデジタルマンガを指す。

1.3.3 電子漫画 (E-BOOK)

一般的な紙形態としての本ではなく、デジタルに変換され、電子機器などで読んだり聞いたりすることができる形の漫画を指す。日本での電子漫画は、オリジナルの紙漫画のデジタル版をインターネットとモバイルを通じて提供している。韓国のウェブトゥーンも電子漫画の一種である。しかし、本研究では「ウェブトゥーン」とは異なる単語に分類し、日本の漫画形式の一つとして定義する。

2. K-webtoonとJ-マンガの違い

2.1 形式の違い

韓国漫画と日本漫画は現在異なる形態をしている。韓国はインターネットで連載する「ウェブトゥーン」、日本は雑誌で連載する「出版漫画」形式を主流にしている。本研究では、このような違いがどのように生じるのかを把握し、両国の文化の違いと今後両国がどのように交流をすべきかについて研究しようとする。まず、日本と韓国、両国の漫画がどのような違いを持っているのかについて論じようとする。

2.1.1 提供媒体の違い

出版漫画とウェブトゥーンの最大の違いは、連載されているメディアの違いといえる。この媒体の違いによる最大の利点は、双方向通信にある。出版漫画は読者が読んだ後、その漫画に対する反応をはがきを通して表わす。作家に意見を送るには、出版社を通じて手紙を送らなければならない。そして作品に対する人気を示すために、日本は作品の登場人物の人気投票を行うが、この人気投票もはがきを通じて実施される。当然、時間を要する構造なのだ。

だが、ウェブトゥーン形式であれば、インターネットに連載後、読者は、コメントや星の数でその漫画に対する反応をすぐに表すことができる。そして、直接作家にメールを送って作品に対する意見や質問などを送ることで作家と直接コミュニケーションまで可能となったのだ。これまでの出版漫画が一方的なコミュニケーションだったとすれば、ウェブトゥーンはお互いに直接意見を話せる双方向コミュニケーションが可能だ。この双方向コミュニケーションにより、作家は作品に対する読者の反応をリアルタイムで確認できるようになり、その意見を作品に直接反映できるようになった。

2.1.2 表現方式の違い

出版漫画とウェブトゥーンは表現方法が違う。出版漫画は、コマによって分割された面が左から右へ、または右から左に配列して時間の流れを表現する。それに対してウェブトゥーン

は、コマとコマを縦につなげて流れを表現する。縦に長く伸びた画像やテキストを 読むことが可能なスクロール方式が、現在の最も普遍化されたウェブトゥーンの表現形式だ。

チョンギョハ、ユン・ギホン（2009、p. 8）は、スクロールはホイールマウスの普及がスムーズに行われて生じた現象であり、インターネットの活用度が高まるにつれて、ウェブページ、またはテキストページのスクロールバーをクリックして下げる手間なくウェブ上でスムーズに読みやすくなったと論じている。

出版漫画とは異なり、ウェブトゥーンは主に提供する媒体がインターネットとモバイルなので、それに合った表現方式を模索した結果だと考える。

2.1.3 時間概念の表現

出版漫画がコマとコマの間の場面転換を通じて暗黙的で表面的な時間の移動を表現したならば、スクロールによるコマとコマの間の画面移動時間を排除したウェブトゥーンの時間観念はより实际的である。

チョンギョハ、ユン・ギホン（2009、p. 9）はコマの境界がページに拘束されないため、時間の連続性を表現することが可能となり、コマとコマの間に存在している部分が背景色が満たされた空間となり、この空間の長さはスクロールの時間を確保することで実質的な時間の概念を持つようになったと指摘している。

既存の紙で出版された漫画は、ページを瞬時に渡すことで時間が速く流れる。だが、ウェブトゥーンはコマとコマの間の空間と縦にスクロールを移動する時間まで利用して、より实际的な時間の流れを生み出している。

2.1.4 アニメーション演出効果

出版漫画はコマとコマがはっきり分離されており、それぞれ独自のシーンを作り出す。しかし、ウェブトゥーンは、2 番目と 3 番目の要因である新しいコマの概念とスクロール概念によって生成された時間は、コマの境界を消すことで、コマとコマの接続を作り出している。これにより連続的な動作を表現するとともに、動作と動作の間にスクロールによる時間を確保して、まるでアニメーションの一場面を見るような錯覚を引き起こすアニメーション的な演出技法を作り出した。

そして出版漫画は視覚的な情報だけを提供するのに対し、ウェブトゥーンは聴覚的な情報も提供できる。連続的なシーンを見ると同時に、そのシーンに合った音楽を使ってよりアニメーション的な効果を発揮する。

このようなアニメーション的な演出をチョンギョハ、ユン・ギホン（2009、p. 9）は、出版漫画では見られないスクロールとインターネットを活用したウェブトゥーンの固有演出方式だと説明している。

2.1.5 カラー漫画の大衆化

コンピューターで製作される作品が多くなり、カラー漫画の大衆化がなされている。出版漫画が主流を成し遂げる際には特別な場合にのみカラー漫画が掲載されたが、ウェブトゥーン

が漫画の大勢をなす現在に至ってはカラー漫画が圧倒的な割合を占めている。それに対し、日本の出版漫画と電子漫画は依然として白黒漫画家が圧倒的だ。

2.2 歴史の違い

上に述べた内容をもとに韓国のウェブトゥーンと日本の出版漫画形式の違いが分かる。だが、韓国が最初からウェブトゥーンで有名だったわけではない。このような差が生じるようになった理由は韓国で出版漫画が衰退して、別の道を探さなければならなかったからだ。以前は韓国も日本と同様に出版漫画も存在し、漫画を専門に扱う雑誌も存在した。さらに、日本と契約を結んで日本漫画を翻訳し、雑誌はもちろん単行本にして出版するほど人気が多かった。しかし、現在韓国では出版漫画は子供の教育のための漫画だけであり、漫画雑誌は出版されていない。

それに反して、日本の出版漫画は依然として国内で人気だ。さらに、世界中で愛されている作品も多く出されており、インターネットやスマートフォンの普及でインターネット上でも漫画を読むことができるようにプラットフォームを作っている。ここまで、形式の違いを述べたので、以下からは漫画事業が変わるようになった理由を歴史を通じて論じたい。

2.2.1 日本漫画の流れ

① 江戸時代

日本漫画史で最初の近代的な意味の漫画は江戸時期に登場した北斎漫画だ。これは貴族や武士を風刺した風刺漫画で地平を開いた。漫画は当時の文章を知らない大多数の民衆に社会の困気を簡単かつ痛烈に見せることで時代的共感を呼び起こした。江戸時代は「大衆が風刺化を享受する時代」となったのだ。木版技術により多種多様な漫画が作られた。清水（2007）はこのように日本漫画の始まりは印刷術の発達に支えられて成長した社会批判と風俗風刺の媒体として行われたと説明している。

② 明治時代

明治時期の漫画は新聞、雑誌という定期刊行物の登場で、その中に漫画を発表できる場を得て発展していく。明治7年、名垣魯文・渡辺暁斎が『江新聞日本紙』を創刊する。横浜でイギリス人・C・ワグマンによって発行されていた『ジャパン・パンチ』をまねたものだ。3号ほどで閉刊となるが、『起訴新聞』（明治8年）『単段陣文』（明治10年）など様々な漫画雑誌の創刊に影響を与えた。清水（2007 p.）は、この当時の漫画雑誌が昭和戦争後まで日本の漫画雑誌の基盤を作ったと説明している。漫画誌は主に絵で構成されているため、文章を読めない庶民たちに流行した。竹内、西原（2016）は彼らのおかげで漫画文化は庶民に徐々に浸透していったと言っている。

③ 大正、昭和戦争前

大正8年には第三次『東京パック』、宮武外骨主宰『赤』が創刊され、鋭い政治風刺化が復活する。朝日新聞社は、コマ画に文章をつけた、いわば漫画漫文というものを作り出す。さら

に映画フィルム上のコマに漫文をつけた映画小説、漫画小説というストーリー漫画を開拓していく。清水（2007）は現代漫画の原流はここから始まったと指摘している。

風刺漫画だけを載せた新聞に 4 カット漫画が登場する。竹内、西原（2016）は『東京アサヒ新聞』や雑誌『アサヒクラブ』によって翻訳され、アメリカのマクマナス作『親爺教育』の影響によるものだと清水しげるは指摘していると説明している。初めて本格的にアメリカの娯楽漫画の影響を伝えたという点で、その後の日本漫画の発展に重要な影響を及ぼした。

大正末期には現在の「単行本」で通じる子供向け漫画も発達した。山森（2013）によると「少年倶楽部」連載作品の単行本化が人気を博したことを契機に、子供向け漫画本出版の刊行は中小出版社や赤本出版社にも波及し、書下ろし形式の廉価な漫画単行本が盛んに制作されたと言っている。

昭和 15 年、各種の漫画家団体も自主的に統合され、新日本漫画家協会が発足し、機関誌『漫画』が発行された。太平洋戦争に突入し、多くの漫画家が徴兵徴用された。昭和 18 年には日本漫画峰公会（会長北沢楽天）が 90 人余の漫画家によって結成され、漫画による国策の宣伝や戦意高揚が行われた。漫画が政治的な目的に使用された。

④ 昭和戦後

昭和 20 年代は戦後漫画の基盤を作った時代だ。長谷川町子「さざえさん」は、「夕刊フクニチ」から朝日新聞に移動し、常に最高水準のギャグ漫画を人々に示してきた。そこから赤塚不二夫のストーリーギャグの傑作が生まれる。

手塚治虫は『新宝島』『地底国の怪人』『鉄腕アトム』など様々な技法が使われた漫画を連載した。これについて竹内、西原（2016）はその表現法とストーリーのレベルの高さで戦後コミック界に多大な影響を及ぼしたと指摘している。

週刊漫画もこの時代に登場する。『週刊漫画 times』（昭和 34 年）『漫画サンデー』（昭和 34 年）『少年マガジン』（昭和 34 年）『少年サンデー』（昭和 34 年）などである。これらは現在、日本最長数誌としての記録を更新している。この時期の漫画と雑誌の形状が現代と最も似ているといえる。

⑤ 現代

平成に入り漫画雑誌、単行本の発行部数は拡大の一途をたどる。だが、平成 6 年に「少年ジャンプ」が 653 万部を発行したことをピークに徐々に減少を見せている。これについて清水（2007）はゲームの人気や携帯電話の普及がコミックの発行部数、販売総額の減少に影響を与えていると論じている。

現在は、電子漫画やライトノベルなどと連携して新しい活路を開拓しており、アニメーション、ゲーム、映画の原作として使われている。

2.2.2 韓国漫画の流れ

① 近代韓国漫画の誕生

韓国近代漫画の始まりは『大韓民報』イ・ドヨンの挿画と規定している。これは 1909 年当

時の日刊新聞である『大韓民報』を通じて日本の韓国強制合放に対する風刺漫画だ。『大韓民報』が日本によって強制閉刊されるまで木版漫画を通じて当代の現実を風刺する作品を発表した。

キム・ジョンオク(2006)は、韓国近代漫画の始まりは風刺漫画と新聞漫画の二つの特徴を持っている作品だったと指摘している。韓国の漫画も日本と同様に新聞に連載された風刺画から始まった。

② 日帝強占期

韓国が植民地になり、日本の政策によって日本に対する風刺と愛国啓蒙的活動をしてきた多数の新聞や雑誌が閉刊された。日本は言論を統制し、朝鮮総督府の機関紙である「毎日新報」に日本の立場を代弁する漫画を連載した(キム・ジョンオク 2006)。

1919 年 3.1 運動以後、日本の政治方式が回遊的に変わることになる。それでマスコミ活動が部分的に許可され、再び新聞が発行されるようになった。この当時、創刊された

『東亜日報』、『朝鮮日報』には、当時の状況を風刺した漫画と最初の 4 コマ漫画が登場する(キム・ジョンオク 2006)。

日中戦争と太平洋戦争の始まりにより、韓国は再びメディアを統制される。日本は日本語の使用を強要し、韓国のハングル教育も中断した。それと共にハングルのすべての媒体も廃刊させた。連載されていた漫画も閉刊させ、韓国漫画は跡を隠すことになる(キム・ジョンオク 2006)。その場を日本の漫画が占めることになる。

③ 解放後の成長期 (1950~1960)

日本の支配から解放され、メディアは自由を取り戻した。これにより新聞と雑誌の創刊が活発になった。漫画も活発な活動を始めた。時事漫画もまた生き返り、娯楽、児童漫画も活性化された。

この時期の珍しい点は、これまで新聞や雑誌に挿入されていた漫画が独立した本としての発行が初めて試みられた。この時期は漫画産業が爆発的な成長を始める時期だ。漫画に対する需要が増え、漫画本を借りることができるレンタル店ができた。それと共に多様なジャンルができた時期でもある。

④ 暗闇の時期 (1970)

経済成長だけを最高の価値だと考え、文化生活が罪悪で治められた時期だ。その影響で漫画は国民の労働時間を奪う社会悪に転落することになる。漫画に対する審議と規制により、多くの漫画作家が当時の作品活動を放棄することも発生する。韓国漫画の発展を阻害した時期だ。

⑤ 復興期 (1980~1990)

長編漫画とストーリー漫画によって韓国漫画市場が再び復活する。漫画を専門的に扱う漫画雑誌も登場する。これまでも有名な作家たちが活動し、最初の女性漫画専門誌も登場する。様々な分野の雑誌と単行本の発行で再び全盛期を迎える。

アニメーションの制作と SICAF（ソウル国際漫画アニメフェスティバル）の開催など産業的コンテンツとして漫画の経済的側面が浮き彫りになった 1990 年代は、肯定的な面とともに漫画レンタル店の広がり、漫画雑誌の閉刊とそれに伴う出版漫画市場の崩壊が始まった時期でもある。

⑥現代（21C）

21 世紀の大韓民国は IT 強国だ。家ごとにコンピュータが置かれ、どこでもインターネットを使用できる。漫画の主な消費層である子供と青少年は、印刷媒体よりも映像物にさらに適応力が高い。

漫画の提供媒体が紙からインターネットに移るようになった。メディア漫画ジャンルであるウェブトゥーンは、インターネットポータルサイトの連載を基盤に急激に拡散した。数多くのウェブトゥーン作家たちは面白い内容とアニメーションを見るようなクオリティの高いイメージなど素材、表現方式などでさらに個性が強くなり、読者の多様な欲求を満たしている。

2.3 違いが生じた理由

上で述べたように、韓国と日本の漫画事業の発展はほぼ同様の様相を見せている。違いがあるとすれば近代に入って日本はそのまま出版漫画が発展するが、韓国は出版漫画が衰退してインターネット漫画、ウェブトゥーンが発展することになったということだ。このような違いが生じた理由を以下にまとめたい。

2.3.1 規制

民主社会は基本的に表現の自由を持つ。これは漫画も同じだ。しかし、芸術活動として漫画の創作表現は無限の想像力と素材の多様性を基本前提とするにもかかわらず「漫画表現の自由」に関する抑圧構造はまだ多くの国でさまざまな形で固着している。この漫画表現の自由について、ユン・ギホン、キム・ビョンス(2008)は、国家の法律と公権力の規制と社会的規制、そして自律規制（日本は自主規制で表現）に分かれるという。以下では、韓国と日本でどのような形で規制がなされるかを論じようと思う。

2.3.2 韓国漫画表現の規制

① 法的規制

現在韓国で最も多く行われている規制の一つがこの法律的規制だ。1909 年の新聞漫画で出発した韓国漫画の初創期から日帝強占期の武断統治で韓国漫画は多くの弾圧を受けてきた。主に新聞漫画、挿画を中心に制裁が行われてきた。

軍部独裁政権がなされた 1960～1992 年までの段階は、「政治的弾圧」と「不良漫画取り締まり」という 2 つの規制がなされてきた。また、降政治的表現の自由が性表現を抑圧する仕組みに変わり、特に 97 年広範な芸術ジャンルに対する規制がなされた。韓国漫画の始まりから政権による法的弾圧がひどかったことが分かる。

現在韓国で行われている法律としての規制の最も代表的なものは国家保安法と青少年保護

法である。ユン・ギフン、キム・ビョンス（2008）によると、この中でも一般漫画に対する規制は主に青少年保護とポルノ規制という名分で行われているという。青少年たちの飛行と逸脱行為が深刻になる状況でこれに対処するためだ。

現在国内の判断基準に関する国内の学説と判例は①社会通念に従わなければならない、②平均人（普通人）標準主義に立脚しなければならない。③作品全体を評価する全体的考察方法に従わなければならない。④法的判断でなければならない。⑤専門家の意見を尊重しなければならないと規定されている。しかし、この基準についてユン・ギフン、キム・ビョンスは、次のように説明している。

淫乱物に対する規制は曖昧な用語（普通人、善良な性的道義観念、性的恥心）などにより裁判官の恣意的解釈が可能であり、淫乱の概念を抽象的に定義して言論自由を侵害し、媒体特性と性表現現物の関連性に対する観念は明らかではない（ユン・ギフン、キム・ビョンス 2008、p. 3）

一般漫画の規制をすることに一定の基準が定められたのではなく、判断する人間に委ねられたということだ。もっと正しい規制をするためには、曖昧な用語ではなく、正確な用語と基準が必要になると考えられている。

② 社会的規制

漫画規制に対する社会的規制は、主に保守的な市民社会団体が課題を作っている。代表的な団体に淫乱暴力性助長媒体対策市民協議会（32 団体参加）とキリスト教倫理実践運動などがある。彼らの批判は健全保守、道徳性回復の次元で始まり、1990 年から 8 年間スポーツ新聞から始まり、漫画全般に影響を与えた。

このような団体の批判は漫画だけでなく他の芸術家たちにも直接的な圧迫を加えたが、これに対してユン・ギフン、キム・ビョンスは次のように論じている。

韓国民族芸術人総連合のアンケート調査結果でも明らかになるが、アンケート結果 18.4% の 44 人の芸術家たちが創作に関連して立件されたことがあり、特定の宗教や右翼団体、区役所、安寄部、警察など国家機関から司法処理脅威、電話盗聴、保護者および教育庁の圧力を受けたと答えた（ユン・ギフン、キム・ビョンス 2008、pp. 3-4）。

漫画だけでなく様々な芸術活動にも暴力性と淫乱性は規制する動きを見せる。しかし、特定の政治的性格を持つ団体の行動であり、本当に青少年を保護するための名目なのかは明らかではない。

このような抑圧にも作家たちはあきらめなかった。法的な規制の問題点と社会団体の「連載漫画が青少年に悪い影響を与える」という主張に対して積極的に対処した。彼らはこれと共に国会請願運動とマスコミ広報、代替立法化、表現の自由署名などを主導した。漫画の表現の自由のために戦ったのだ。

③ 自律規制

この自律規制は日本と異なる様相を帯びるが、ユン・ギホン、キム・ビョンス（2008）は韓国は基本的に審議制度（法的規制）により規制がなされるので日本のような出版社などによって行われる自律規制は根本的に異なるという。漫画を提供するプラットフォームが検収をするのではなく、この規制に特化した委員会が審議をする。

現在、韓国のウェブトゥーンも自律規制を受けている。この自律規制について韓国ウェブトゥーン自律規制委員会は次のように説明している。

2018 年には自律規制の過程でウェブトゥーンの作家とプラットフォームの多様な要求を反映して年齢等級導入の問題を検討した「ウェブトゥーン自律規制年齢等級基準に関する研究」を施行した。これにより、ウェブトゥーンを提供しているプラットフォームに全年齢、12 歳、15 歳、18 歳の等級導入を勧告する一方、「主題」、「暴力性」、「選択性」、「言語」、「薬物」、「死行性」、「模倣リスク」、「差別」計 8 つの等級分類基準を提示し、2019 年 5 月からウェブトゥーン自律規制委員会と協約を結んだプラットフォームごとに連載作品に対する年齢等級表記を施行している（Webtoon 自律規制委員会）。

以前は事前審議を通じて暴力的な描写はすべて消えた。しかし、ウェブトゥーンを提供するプラットフォームが判断できるようになった。

2.3.3 日本の漫画表現規制

① 法的規制

日本では比較的性と暴力の表現が自由であるという見解が支配的だ。日本の場合、表現の自由に対する法律的制裁基準は主にわいせつ罪に関連して行われたが、代表的なものが 1957 年の「チャタリ事件」の最高裁判所判決と 1980 年の「四畳半襖の下張」事件判決がある。これらの判例は、表現の自由に対する先例として日本社会に決定的な影響を与えた。

チャタリ事件について韓国刊行物倫理委員会は、日本最高裁判所がポルノ基準をひたすら性欲を刺激、興奮させること、そして普通人の正常な羞恥心を害すること、善良な性的道義観念に反すると規定したと見ている（パク・ユンサン 2003、p. 67）。＜四畳半襖の下張＞事件では「性に関する描写記述があり、露骨。詳細は、上記の記述が文書全体で大きな比重を占めること、以上の 2 点をもとに文書全体が主に読者の好色的興味に重点を置いたもの」などを提示した（パク・ユンサン 2003、pp. 69-70）。日本の法的規制が暴力性ではなく主に淫乱性に焦点が当てられていることが分かる。

韓国と同様に、これらの判例の最大の争点は、日本でも「正常」、「善良」という単語が一般社会基準の様式と通念による判断基準に適合するかという問題が存在する。これに対して、ユン・ギホン、キム・ビョンス（2003、p. 6）は、「当時専門家らは青少年に悪影響を理由に性的メディアを規制することは科学的根拠がなく、青少年条例で十分規制」できると論じていると伝えた。こうした判例は、土台で日本は韓国とは異なり、法的規制は漫画に対する公権力の表現の自由侵害という見解が支配的だと考えられている。

② 社会的規制

日本も韓国と同様に、市民団体や社会的倫理規範に反する漫画に対する有形無形の規制は着実に存在してきた。日本は自律規制などを通じて検閲制度はないが、事実上の検閲があると主張する意見も多い。

市民社会でどこまで容認するかという問題が論争を呼び起こし、さらに法的規制にまで作られる過程は世界どこでも同様の現象だろう。日本社会では社会的規制による論争は 50 年代の悪書追放運動と 90 年代のいわゆる「有害漫画」論争がある。

この運動は、〈日本の子どもを守る会〉、〈母会連合会〉、〈PTA(親と教師の会議)〉などによって最初に提起された後、〈図書選定制度〉、〈青少年保護育成犯案〉など日本政府と自治体の漫画規制や出版社などによる自律規制まで多くの影響を与えた。

有害漫画論争は 1989 年連続女児誘拐殺人事件の犯人が漫画、アニメーションのファンという報道で始まった騒動だ。朝日新聞が子供漫画が子供に悪影響を与えるという社説を掲載した後、和歌山（コミック本から子どもを守る会）が署名運動を展開し始めた。これに〈PTA〉が参加し漫画に登場する暴力表現について非難を受け始めた。研究によれば、自治体と政府もこの規制に同調し、出版社の自律規制に対する圧力を行使したことも論じている（ユン・ギホン、キム・ビョンス 2003、p. 6）。

日本も韓国と同様にこのような抑圧にあきらめなかった。出版社と漫画家たちが団体を作って彼らに抵抗した。表現の自由と法律に対して反対し、児童ポルノ禁止法に関する処罰及び児童保護等に関する法律の問題点を指摘し、反対運動を行った。研究によると、彼らは現在も各種規制に対して監視活動を続けているという（ユン・ギホン、キム・ビョンス 2003、p. 11）。

③ 自律規制

90 年代の有害漫画騒動で、漫画業界の自律規制が急速に進んだ。漫画出版社は自律規制を宣言し、青少年に有害と判断される漫画に自ら「成人漫画」指定表示をする自救策を設け、同人誌印刷業組合が 2007 年 7 月、同人誌の性表現に対する制限を強化すると発表するなどもあった。出版社の「ガイドライン」が城の描写レベルを設定し、自治体の条例が漫画商品の流通網を規制することで効果的な統制手段として作用したのだ。

また、ほかにも天皇制や障害者描写などタブー視されるのも自律規制といえるが、これに対して、イ・ヒョンソクは、漫画家サブカルチャーとしての認識が強く興行を目的とする出版資本が私的问题や少数者などの問題、そして社会病理を除外するためだと指摘している（イ・ヒョンソク 2006）。

この自由規制について研究では「大型事件があるたびに漫画とアニメーションに対する自律規制が実施された」（ユン・ギホン、キム・ビョンス 2008、p. 7）と論じている。

2.3.4 韓国で規制が成功した理由

上記で述べた内容を通じて、日本と韓国の漫画に対する規制状況について知ることになった。どちらの規制も問題を抱えている。そのような問題を見極めるために、両国とも作家と出

版社、市民団体が努力した。

しかし、日本はこのような規制を勝ち抜いて漫画事業が発達したのに対し、韓国は検閲制により出版漫画事業が崩壊した。この違いは、当時の時代に存在すると考える。このような規制が最もひどかった時代が韓国の経済危機時期だった。経済状況が悪い状況で儒教的性向が強い社会団体の規制が活発だった。経済的状況と文化的状況によって韓国の漫画事業の基盤が崩れたのだ。

経済危機と規制を克服した後は、すでに多くの出版社が消えた後だった。そのような状況で韓国のインターネット技術が徐々に普及し、急速に成長していきながら多くの漫画作家がインターネットに目を向け始めた。そのため、韓国ではウェブトゥーンが発達するようになった。

3. 文化流入による変化

上で述べたように韓国のウェブトゥーンと日本の出版漫画は形式と歴史の部分でかなりの差を見せている。このように同じ文化でも国によって異なる形をとることになる。本論では、このような違いがある文化が韓国と日本、両国に流入し、どのような変化を見せ、どのような問題が生じたかについて論じようと思う。

3.1 韓国 - 日本漫画の流入

3.1.1 漫画市場の変化

韓国は長い間日本の支配を受けた歴史を持っている。よって、日本の文化への流入を全面的に禁止していた。だが、1998年10月以降から段階的に日本文化の流入が進んだ。日本の漫画だけでなく、映画、音楽、ゲームのような大衆文化が入ってきた。以下で日本の文化が入ってきて変わった点について論じようと思う。

日本の漫画家が韓国に正式に入る前から韓国で日本の漫画は多くの人気を集めた。韓国の激しい検閲を受けた漫画とは異なり、日本の漫画は内容面では専門化、細分化、そして絵スタイルでは繊細化という特徴を持っていた（ジョン・ユソン 1997、p. 70）。そのため、子供を主要ターゲットした韓国漫画の年齢層が上昇し、主顧客層が10代後半から20代前半に変わることになった。漫画の内容も子供中心ではなく青少年や大人漫画に変わることになった。韓国漫画市場に多くの変化をもたらした。

日本漫画の流入で韓国漫画は質的に大きく成長することができた。有名な韓国漫画の場合、日本の漫画とよく似ている点がある。は韓国漫画の需要と質を同時に高めてくれた。

3.1.2 認識の変化

そして、韓国に入ったのは漫画だけではない。アニメ、映画、文房具など様々な分野の分かが入ってきた。研究（ノ・ホングク 2009、p. 47）によると、韓国で最も人気が高いのはアニメで2002年と2005年とも1位を占めた。そして、日本漫画がその後に続く。韓国でも人気を誇る日本のアニメと漫画を通じて、韓国人、特に青少年たちの日本に対する認識が変わった。日本大衆文化流入について、ノ・ホングク（2009、p. 48）は次のように説明している。

日本の大衆文化開放に対する考え方を問う質問に対して、韓国青少年たちは日本の大衆文化正式開放を「肯定的」に受け入れていることが分かった。日本の大衆文化正式開放を肯定的に受け入れている学生は「46%」である反面、否定的に受け入れている学生は「14%」に過ぎないと調査された。また、肯定も否定でもない学生が「39%」であることを考えると、ほとんどの韓国青少年は日本の大衆文化を拒否することなく「肯定的」として受け入れていることがわかった（筆者訳）。

韓国は日本と長い間悪い感情を抱いていた。しかし、新しい文化の流入により変わるようになった。漫画の流入で韓国漫画市場はさらに発展するようになり、日本に対する視線も肯定的に変わるようになったといえる。

3.2 日本 - Webtoonの流入

3.2.1 漫画市場の変化

長い間、日本の漫画産業の中心には、単行本と漫画雑誌が位置してきた。出版社は基本的に漫画雑誌を定期的に発行し、その中で人気のある漫画を単行本として出版させた。研究によると、漫画雑誌が 1995 年全盛期を過ぎて持続的な下落傾向と赤字を記録したため、人気の単行本収益を通じて雑誌部門の損害を補うことが 1990 年代以降一般的な漫画ビジネスモデルであった（飯田 2019、p. 54）。しかし、モバイルを中心にメディア使用環境が変わり、状況は大きく変わった。オンライン漫画市場の急な成長と印刷出版市場の全体的な減少は、紙漫画を中心とした既存のビジネスモデルにも深刻な打撃を与えた（韓国コンテンツ振興院 2020、p. 108）。今でも数多くの漫画が紙出版物の形で製作流通消費されている。しかし、印刷媒体に依存する傾向が強かった日本の漫画産業に変化が起きたことは否定できない事実だ。

日本に電子漫画市場がまったく存在しなかったわけではないが、これは副次的な地位にとどまっていた。主にアマチュア作家たちが作品の広報のためにウェブ上で無料で公開をして人気を得た後、出版社と契約をするのが一般的だった。しかし、モバイルを中心にメディア使用環境が再編され、オンライン漫画市場が急激に成長し始めた。研究によると、2017 年以降からは電子書籍売上が紙本売上を上回っており、3 大出版社が漫画本上位圏を占めていた産業構造も崩れるようになったという（ユン・テジン、イ・ヒョミン 2021、p. 124）。

飯田（2019 p. 9）によると、これは紙本から電子書籍への読者移動という単純な次元の変化ではない。「漫画本売上地上主義」を作り出した伝統的な漫画ビジネス自体の根本的な変化だという。今はウェブサイトやアプリが漫画出版と流通の核心だった漫画雑誌の役割に代わるようになった。

ユン・テジン、イ・ヒョミン（2021、p. 125）によると、2014 年に初めて存在感を表わした電子漫画はわずか 5 年ぶりの 2019 年に産業的面では紙漫画より優位に立つようになったという。このような電子漫画が目立つ成果を見せるにはいくつかの背景がある。『出版月報』（2020）によると、日本で違法海賊サイト「漫画村」の閉鎖（2018 年 4 月）は、電子漫画市場の上昇傾向に大きな影響を及ぼしたと説明している。海賊版を利用していた消費者が正規電子ブックストアとアプリに移動することになったのだ。このような外部条件の変化に伴い、内部

関係者の自らの努力も続いた。

既成出版社は有名漫画の電子版を無料で提供したり、プラットフォーム別差別化のために特定作品を先に供給したり、オリジナルコンテンツを制作した。さらに、いくつかの出版社は、独自のアプリケーションやWebプラットフォームを開発するなど、電子漫画ビジネスに積極的に参加する姿を見せている。

日本の漫画ビジネスの新しい変化は、出版というオールドメディアが劣り、スマートフォンとウェブというニューメディアが成長しながら自然に現れた結果であり、K-ウェブトゥーンがマンガ市場を有意に刺激しているという証拠となる。現在、日本の電子漫画市場でNAVER一の「ラインマンガ」、カカオの「ピッコマ」、NHNの「コミコ」が占めるシェアは70%以上だ（グ・ミンギ 2020）。すでに韓国プラットフォームが電子漫画市場の先頭を占めているため、既存の出版社が独自にアプリを開発して電子漫画を流通させるとしても、追いつきにくい状況となった。

ただし、韓国ウェブトゥーンが漫画強国日本を制覇し始めたというわけではない。大衆的人気を集める K-ウェブトゥーンはそれほど多くない。ユン・テジン、イ・ヒョミン（2021）によると、少数の韓国デジタルコンテンツ流通企業が市場の過半数を占有しているが、韓国作家による韓国ウェブトゥーンが強勢を見せるわけではないという。韓国のウェブトゥーン「プラットフォーム」が日本大衆にウェブトゥーンを紹介する一方、他の出版社の作品を取り込んで提供する方式で電子漫画の全体的な流通に責任があると見なければならないだろう。

3.2.2 認識の変化

ウェブトゥーンと出版漫画がそれぞれ韓国と日本を代表する大衆文化コンテンツであるだけに、ウェブトゥーンに対する日本独自の態度には政治的・歴史的利害関係が一定部分反映されている（オ・ミヨン 2006）。研究者たちは、日本の読者がウェブトゥーンについて話すとき、韓国に対する良い感情や悪い感情がどのように表れているのか、それとも現れないのかを観察しようとした。

ユン・テジン、イ・ヒョミン（2021）もピッコマで最も高い人気を得た K-ウェブトゥーンの5作品（〈私だけレベルアップな件〉、〈盗掘王〉、〈テムパル〜アイテムの力〜〉、〈ゴッドオブブラックフィールド〉、〈トリガー〉）を選定し、彼らに対する日本の読者たちの反応を調査した。興味深いことに、K-ウェブトゥーンに対する酷評や偏向的な態度を見つけるのは容易ではなかったという。

ほとんどの読者は、国籍などの外的基準を真剣に考慮するのではなく、内的基準に従ってのみ、コンテンツの楽しさを評価した。時々K-ウェブトゥーンの独創的な作画スタイルに興味を示したこともあった。すでに K-ウェブトゥーンを楽しんで読んでいる読者の反応だったので一見当たり前だと見ることもできるが、作品を評価しながら先鋭な韓日関係がほとんど水面上に現れないという点は示唆するところが大きい。以前の韓国テレビドラマや歌謡に対する関心と人気がそうであったように、質的水準に優れ、関心度の高い作品に対しては国籍性の否定的影響力が弱まる可能性を示している。

書店やコンビニを中心に漫画雑誌や単行本が流通していた過去とは異なり、数多くの漫画

アプリが生まれた今より多くの読者が漫画文化に流入している。これは、雑誌の認知度やブランドで作品の勝敗を決めた時を過ぎ、作品そのものに対する評価が可能になったことを意味する（グ・ミンギ 2020）。

日本の漫画読者が漫画アプリを経由して韓国ウェブトゥーンという不慣れなコンテンツに触れながら興味を持つようになる可能性も非常に高まった。民族的敵対感(嫌韓)よりはその作品として尊重し、楽しむことができる。K-ウェブトゥーンに対する無国籍的・好意的反応は、この現象の事例であり、今後の可能性を感じさせる証拠だと筆者は考える。

4. 文化流入の問題

上で韓国のウェブトゥーンと日本の出版漫画が各自の国に入ってきて変わるようになったことについて述べた。どちらも漫画市場に大きな変化をもたらし、各国に対する認識にも肯定的な影響を与えた。しかし、新しい文化の流入は新しい問題ももたらした。以下では、両国でどのような問題が生じたかを説明しようと思う。

4.1 韓国の場合

韓国に日本漫画が入った時期は韓国漫画市場が没落した時期だ。そんな状況で、日本の漫画は韓国漫画市場を再び活発にさせた役割を果たした。しかし、それによって問題が発生した。韓国の漫画市場を日本の漫画が占めてしまったのだ。現在韓国漫画市場で日本漫画は約8割以上を占めている。ほとんどの出版社と漫画雑誌が日本の漫画を扱っているということだ。韓国漫画が出てくる場所を失ってしまったのだ。

日本の漫画は明らかに韓国の漫画に対する需要を増やすのに貢献した。だが、韓国出版漫画市場を韓国の漫画ではなく日本の漫画が大部分を占めるようになり、韓国の出版漫画は衰退の道を歩んだといえる。

もう一つの問題は青少年に対して現れた。日本の漫画は韓国の漫画より暴力的描写と選定的な描写が強い。そのような漫画を大人向け漫画ではなく青少年も読める漫画として韓国に流入した。したがって、青少年の価値観、態度などに最も悪影響を及ぼす日本の大衆文化は、選定的でわいせつな漫画にあるという見方が支配的だ。

研究（ノ・ホングク 2009）によると、「日本の大衆文化によって青少年に発生する問題点」を尋ねる質問に対して、韓国青少年たちは「暴力的でわいせつな漫画」と「いじめ（いじめ）」と答えた。日本漫画を最も面白く読んでいる青少年たちも日本漫画の暴力性と淫乱性を認知しているといえる。

日本漫画は韓国の漫画より暴力的で選定的な一面を持っており、韓国漫画では見られない楽しさと新鮮さを持っている。だが、影響を受けやすい青少年に悪い影響を及ぼしているのも事実だ。

4.2 日本の場合

韓国のウェブトゥーンは日本の漫画市場がインターネットに移されることに寄与した。だが、それによって韓国に対する嫌悪感も一緒に起こるようになった。

オンラインで「嫌韓」談論を主導する勢力を中心に K-ウェブトゥーンの評価を下げ、ウェブトゥーンの日本市場進出を非難する声が存在した。日本の代表的な嫌韓メディア「レコードチャイナ(Record China)」は「韓国経済新聞」記事を紹介し、韓国読者の冷笑的コメントを伝えた(ク・ミンギ 2020)。「ラインマンガのほとんどが日本漫画なのに K-ウェブトゥーンと言えるか?」、「版市場が減ってウェブトゥーン=漫画市場全体ともいえる韓国と、出版市場がまだ主流の日本を比較するのか?」、「ウェブトゥーンは韓国が優位。それでも日本は漫画本が主流だ。漫画本市場の規模を比較すれば相手にならない」などの韓国ネチズン反応は日本漫画の誇りを強化する材料として活用された(Record China 2020)。そしてこの記事は国粹的排外主義で有名なサイトである「5ちゃんねる(5ch、過去名称 2ch)」に積極的に引用されて K-ウェブトゥーンを嘲笑する反応を見せけている。

嫌韓感情が K-ウェブトゥーンに対する否定的評価を生成し、これがオンライン上で繰り返し再生され、上昇作用を引き起こす可能性もある。韓国では日本漫画の暴力性により韓国の青少年たちに悪影響を及ぼしていると考えている。

5. おわりに

本研究は、異なる形式の文化が日韓にどのような影響を及ぼしたのかを調査することを目的としている。それを韓国のウェブトゥーンと日本の出版漫画に基づいて調査した。

韓国のウェブトゥーンと日本の出版漫画は各国の漫画市場に大きな変化をもたらした。韓国の漫画市場の規模をさらに拡大させ、質的にも向上させた。日本の漫画市場も規模がさらに大きくなり、出版漫画だけに気を使った漫画市場の版図を変えた。異なる形式の文化が各国によく定着した結果だ。

しかし、このような流入には必ず問題が発生する。韓国の出版漫画の大部分を日本漫画が占めてしまった文化侵食も起きている。日本も同様に韓国に対する嫌悪感が現れている。ウェブトゥーンに対する批判的な記事も出しており、その記事を積極的に利用して粗訴する反応を見せる。異なる文化の流入により、既存文化との衝突と悪い日韓関係という政治・文化的争点を起こしたのだ。

上に述べたように、新しい文化の流入は、既存にあった文化をさらに発展させた。それと同時にその国に対する悪い感情も一緒に呼び起こした。特に韓国と日本の関係性は複雑な歴史があり、その背景も少なからず影響しているだろう。

だが、現在も両国の文化流入は続いている。日本で韓国のウェブトゥーンをアニメーションにしたり、日本の出版漫画を韓国のウェブトゥーンのように連載するなどの動きを見せている。他にも様々な分野が入ってきている。これは、国際社会で他国の文化が入ることは避けられないことを示しているのかもしれない。

このような文化流入で最も必要なのは、他の文化を受け入れる私たちの態度だと思う。文化を無作為に受け入れるのではなく、その文化をどのように活用し、どのような問題を引き起こすかについて考えることが重要である。

そして、流入してくる文化をその文化自体で判断することが重要だと思う。今回の研究でも分かるように、お互いの国に対する悪い感情を引き出している。これは、両国の歴史的な問

題が判断に含まれたためだ。すでに否定的な感情が内包された判断は正確な判断とはいえない。特に、韓国と日本はその傾向が強いといえる。文化を判断する上で、このような視点は良くない。その文化だけで判断する姿勢が必要だ。

文化の流入は一国だけの問題ではない。関係するすべての国と一緒に悩むべき問題だ。より良い文化交流のために、相互の積極的な意見交換が必要だろう。

参考文献

- 荒俣宏 (2015) 『日本まんが第壱巻：「先駆者」たちの挑戦』東海大学出版
- 飯田一史 (ソン・ジョンウ 訳) (2019) 『漫画雑誌は死んだ、ウェブ漫画全盛時代』ソウル：ヨダ
- 茨木正治 (2007) 『メディアのなかのマンガ：新聞一コママンガの世界』臨川書店
- 清水勲 (2007) 『年表日本漫画史』臨川書店
- 鈴木崇宏・高橋光輝 (2015) 「電子書籍における漫画の動向」『情報処理学会研究報告・DCC、デジタルコンテンツクリエーション』 pp. 1-8
- 出版科学研究所 (2020) 「特集：紙&電子コミック市場 2019」『出版月報』2月号
- 竹内オサム 西原麻里 (2016) 『マンガ文化 55 のキーワード』ミネルヴァ書房
- 出口弘 (2014) 「日本漫画と文化多様性 マンガをめぐる現状と歴史的経緯」『情報の科学と技術』64 巻 4 号 pp. 122-132
- 山森宙史 (2013) 「コミックスという出版メディアの生成」『関西学院大学大学院』82 巻 pp. 153-172
- 구민기 (グ・ミンギ) 『K 웹툰, ‘망가왕국’ 日 접수…네이버·카카오 1 위 경쟁』
(<https://www.hankyung.com/it/article/2020071299931>) (閲覧 2022/6/13)
- 김종옥 (キム・ジョンオク) (2006) 「한국 근대만화의 예술적 특징에 관한 연구-1990년대초부터 1945년까지의 측면을 중심으로-」『만화애니메이션 연구』no. 10、pp. 33-53。
(韓国近代漫画の芸術的特徴に関する研究-1990年代初頭から1945年までの側面を中心に-)
- 박용상 (パク・ヨンサン) (2003) 「표현의 자유와 음란규제 및 청소년보호」、
『한국간행물윤리위원회』p. 67-70 (表現の自由と淫乱規制と青少年保護)
- 오미영 (オ・ミヨン) (2006) 「일본 내 한류 수용과 타자 인식의 변화」『현상과인식』98 호,
pp. 34-56 (日本における韓流受け入れと打者認識の変化)
- 윤기훈・김병수 (ユン・ギフン キム・ビョンス) (2008) 「한국, 일본의 만화표현의 자유 규제 연구」『만화애니메이션 연구』no. 14、pp. 1-13。(韓国・日本の漫画表現の自由規制研究)
- 윤태진・이효민 (ユン・テジン・イ・ヒョミン) (2021) 「K-웹툰의 일본 진출에 따른 J-망가 시장/문화의 변화 - 매체기술의 발전과 산업지형의 변화를 중심으로」『애니메이션연구』vol. 17、no. 1、통권 57 호 pp. 114-144。(K-ウェブトゥーンの日本進出に伴うJ-マンガ市場文化の変化 -メディア技術の発展と産業地形的変化を中心に)
- 이현석 (イ・ヒョンソク) (2007) 『만화왕국 일본의 알려지지 않은 진실』부천만화정보센터
(漫画王国日本の知られていない真実)
- 정규하・윤기훈 (ジョン・ギョハ・ユン・ギホン) (2009) 「웹툰에 나타난 새로운 표현형식에 관한 연구」『만화애니메이션 연구』no. 17 pp. 5-19 (ウェブトゥーンに現れた新しい表現形

式に関する研究)

한국콘텐츠진흥원 (韓 国 コ ン テ ン ツ 振 興 院) (2020) 「 2019 만화 산업백서 」
한국콘텐츠진흥원(2019 漫画産業ホワイトペーパー)

Record China『韓国のウェブトゥーンが漫画王国の日本を席卷? =韓国ネット「日本と比べちゃ駄目」』 (<https://www.recordchina.co.jp/b820573-s0-c30-d0058.html>) (閲覧 2022/6/13)

ベトナム人学習者による日本語意見文の構造的特徴と主張の述べ方 —日本人学生との比較において—

グエン ティエン ガー (NGUYEN Thien Nga)

(ベトナム・ハノイ国家大学外国語大学)

1. はじめに

ここ数年、ベトナム人日本語学習者の存在の重要性が認識されはじめている。国際交流基金の「2018 年度海外日本語教育機関調査」によると、ベトナムの日本語学習者数は 174,521 人であり (2015 年度比 169.1%増)、世界 6 位であった。

日本語を勉強する際に、文章を執筆する能力が非常に重要である。しかし、ベトナムにおけるほとんどの日本語教育機関が日本語能力試験 (JLPT) を重視する中、この試験にはライティング問題がないため、日本語のライティングに関する教育は、十分になされていないと言えよう。そのため、ベトナム人日本語学習者にとって、日本語で効果的に文章を書くのは非常に難しい。

作文を指導する際に意見文を書かせることが多いと言われる。意見文とは、自分の考えや意見を伝える一つの作文ジャンルである。「意見文」では、自分の意見を述べ、理由や根拠 (サポート) を挙げることによって、その意見の正当性、妥当性を示し、相手に理解してもらうことを目的」とするものである (田中・阿部 2014)。意見文においては、文章構造と主張の述べ方が大切だと考えられている。文章構造とは、主張と根拠はどのような流れで書かれたものである。主張とは「テーマに関する書き手の意見が明確に表されているもの」を指す (伊集院 2012)。

日本語母語話者と学習者の間での執筆の相違点と類似点に関しては多くの先行研究があるが、日本語母語話者とベトナム人学習者に関する研究はまだ少ない。そこで、本研究では、ベトナム人日本語学習者と日本語母語話者によって書かれた日本語の意見文を比較し、構造的特徴と主張の述べ方という二つの視点から検証していく。本研究が、今後、日本語教育において、文章表現指導に活用できればと思う。

2. 先行研究

日本人大学生と日本語学習者の意見文を分析し、文章構造について研究したものに、Lee (2006) と伊集院・高橋 (2012) がある。

Lee (2006) では、学部留学生 58 名 (中国語母語話者 46 名、韓国語母語話者 11 名、その他 1 名)、日本人学生 36 名に作文を書かせ、比較した。主張文の現れる位置については、日本人学生と留学生との間には大きな差は見られず、両者とも双括型 (主張は「はじめ」と「おわり」に配置される) が最も多いと結論づける。

伊集院・高橋（2012）は、日本語母語話者と中国人学習者と韓国人学習者による作文を収集し、主張文と文章構造に焦点を当て、研究を行っている。伊集院・高橋（2012）では、文章構造と文末表現（思考動詞・モダリティ・立場表明）について考察し、日本語母語話者が書いた意見文の 60%は、「はじめ」と「おわり」に主張を置く「頭尾型」であり、学習者が書いた意見文は「典型的な文章構造の型は見られない」と述べている。また、「主張」には、日本語母語話者は様々な文末表現を使用しているのに対し、台湾人学習者と韓国人学習者は「思う系」の思考動詞の使用を繰り返し、表現力が乏しいを与えやすいことを明らかにした。

このように、日本語母語話者と中国語母語話者と韓国語母語話者の作文の比較についてはこれまで多くの研究がなされている。しかし、日本語母語話者とベトナム人学習者の作文の相違点について検討したものは、筆者の知る限りではあまり見られない。そこで、本研究では、日本語母語話者（JP）とベトナム人学習者（VN）の日本語作文を比較することで、有効的な作文指導を考案することを目的とする。

3. 研究方法

3.1 分析データおよび調査協力者の概要

本研究の分析について、ベトナム人日本語学習者のデータは著者自身で収集し、日本語母語話者のデータは伊集院郁子（2011）の「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベース」を用いる。分析データの概要は、以下の通りである。

表 1 分析データの概要

執筆者	作文数	段落数（平均）	収集時期
日本語母語話者（JP）	134	553（4.1）	2007 年 6 月～11 月
ベトナム人学習者（VN）	5	25（5）	2022 年 2 月～3 月

執筆者の情報は以下の通りである。

表 2 執筆者情報

執筆者	人数/作文数	性別	平均年齢	所属教育機関
日本語母語話者（JP）	134 名	男性 90 名、 女性 44 名	19.4	東京都内の大学
ベトナム人学習者（VN）	5 名	女性 5 名	21.2	ハノイ国家大学・外国語大学（ベトナム）

ベトナム人学習者側の参加者は、日本語能力試験の N2 レベルであり、日本への滞在経験がない学習者である。日本語能力試験の N2 レベルを選んだ理由は、N2 レベルの日本語力の習得

が、ハノイ国家大学・外国語大学の卒業条件だからである。また、ハノイ国家大学・外国語大学は女性の学生が圧倒的に多いため、性別を制御するために、本研究では男性の学生を対象としない。

日本人大学生の側は、次の課題文を読み、辞書などは使用せずに約 60 分で執筆した。ベトナム人学習者側は、辞書と時間の制限は設けず執筆した。双方の文章を分析し、違いを明らかにする。本研究で扱うデータは、以下の課題文を示し、作文を書かせることにした（伊集院 2011）。

【課題文】 下の文を読んで、自分の意見を 800 字ぐらいの日本語で書いてください。今、世界中で、インターネットが自由に使えるようになりました。ある人は「インターネットでニュースを見ることができるから、もう新聞や雑誌はいらない」と言います。一方、「これからも、新聞や雑誌は必要だ」という人もいます。あなたはどのように思いますか。あなたの意見を書いてください。

4. 分析と考察

4.1 文章構造

文章構造の型は以下の表のように「はじめ（頭）」「なか（中）」「おわり（尾）」のどの部分に強い主張が現れるかによって分類した（伊集院 2010、pp. 91-92）。表にある○は、主張があることを示す。

表 3 主張の現れる位置による文章構造の型

文章構造の型	はじめ	なか	おわり
頭型	○	—	—
中型	—	○	—
尾型	—	—	○
頭尾型	○	—	○
頭中	○	○	—
中尾型	—	○	○
分散型	○	○	○
非明示型	—	—	—

分析の結果は以下の通りである。本分析は作文執筆者が設ける形式段落を単位としたものである。

表 4 文章構造の型による作文数

文章構造の型	JP (%)	VN (%)
頭型	2 (1.5)	0
中型	2 (1.5)	0
尾型	19 (14.2)	0
頭尾型	81 (60.4)	2 (40)
頭中型	2 (1.5)	0
中尾型	21 (15.7)	2 (40)
分散型	6 (4.5)	1 (20)
非明示型	1 (0.7)	0
合計	134	5

表 4 によると、VN の文章構造は頭尾型が 40%、中尾型が 40%、残り 20%は分散型であり、特定の構成は見られない。また、VN と JP 両者とも頭尾型と中尾型の使用率が高いが、JP のほうが多様な文章型を用いる。

VN は常に「背景的情報→主張→根拠→主張」という流れで意見文を書いた。「はじめ」の第 1 文は背景的情報で開始する。ベトナム人学習者によると、大学で「作文」という授業があるが、語彙・文法などの表現レベルを指導されるのが基本的であり、「作文の構成」についてはあまり教えてくれなかったとのことであった。そのため、文章構造については母語での書き方の干渉がある可能性があると考えられる。この説を検証するために、さらに考察を進めていきたい。一方、JP も「(背景的情報)→主張→根拠→主張」の流れで書いたが、「はじめ」第 1 文は背景的情報または主張 (64 例、47.8%) で開始するのが特徴的である。以下は「はじめ」第 1 文の例である。

- VN01-01 スマートフォンの登場何時でも何処でもいつでもどこでも情報を検索し認識し入手することが容易になりました。「背景的情報」
- VN03-01 現在の社会ではインターネット、テレビの発展によって、人々は国内ではなくて、世界の様々な情報に簡単に触れることができます。「背景的情報」
- JP056-01 現代インターネットは我々にとって非常に身近なものとなった。「背景的情報」
- JP121-01 私は、少なくとも今現在の世界状況の下では、新聞や雑誌が不要であるとは思わない。「主張」

「はじめ」に着目すると、「はじめに」主張がある型 (頭型、頭尾型、頭中型、分散型) は、JP が 91 例 (67.9%)、VN が 3 例 (60%) で、ベトナム人学習者と日本語母語話者の間で

大きな違いがあるとは言い難い。伊集院（2017、p.48）は、「冒頭で主張が伝わる文章の方が高く評価されている」と述べている。したがって、ベトナム人学習者に対し、「はじめ」に主張が明示された方が伝わりやすいという指導が必要だといえよう。

「おわり」に主張がある型（頭尾型、中尾型、尾型、分散型）については、JP が 127 例（94.8%）、VN が 5 例（100%）と、いずれの場合も高い割合を占めている。また、VN は、「おわり」の第 1 文に主張を表す一方、JP は「おわり」の末尾の文に主張を述べる傾向がある。以下は「おわり」の例である。

- VN03-18 上記の理由から、紙の新聞や雑誌は必要ないと思います。「主張」
VN03-19 現代のテクノロジーの進歩のおかげで、情報にもっと速く触れることができ、安いだけではなくて、環境を守ることができます。「根拠」
- VN04-15 どんな時でも新聞・雑誌、オンライン新聞の両方が私たちの生活に非常に必要だと思います。「主張」
VN04-16 紙の新聞・雑誌の生産は環境に悪い影響を与えるという意見があるかもしれませんが、オンライン新聞の存在は、紙の新聞・雑誌の生産量が大幅に削減されときの環境保護にも役立っています。「根拠」
- JP055-18 以上見てきた様に、インターネットニュースは、情報の真実性という面で新聞、雑誌と同等で、宣伝の効率性、個人のニーズの充足性、製造コストの低さという点で新聞、雑誌より優れている。「根拠」
JP055-19 ゆえに私は、もはや新聞、雑誌は必要ないと考える。「主張」
- JP096-11 もしも、新聞や雑誌がこの世からなくなったら…私たちは自分の知りたい情報だけを手に入れて、他の情報に興味を持つこともない生活を送ることでしょう。「根拠」
JP096-12 これはあまりにももったいないことです。「根拠」
JP096-13 ひょんなことから手に入れた自分が今まで知り得なかった情報が、私たちに対して新たな世界を広げてくれるかもしれないのですから。「根拠」
JP096-14 以上のことから、私は新聞、雑誌は我々にとって不可欠なものであると思います。「主張」

4.2 主張の述べ方

伊集院・高橋（2012）では、主張の述べ方は文末モダリティ、思考動詞（思う系、考える系）、立場表明（賛成する、反対する、立場をとる）に分類している。「思う系」は「思う、思わない、思える、思っている」の動詞であり、「考える系」は「考える、考えられる、考えている、考えない」の表現を指す。本研究は、伊集院・高橋（2012）の研究を踏襲した上で、VN と JP の主張のある文末表現の出現数及び割合は以下の表のとおりである。

表5 ベトナム人学習者と日本語母語話者の主張の述べ方一覧

文末形式		VN		JP	
		出現数	割合	出現数	割合
モダリティ	だろう	0	0	38	12.6
	のだ	0	0	12	4.0
	のではない（だろうか）	0	0	8	2.6
	べきだ	0	0	5	1.7
	なければならない	0	0	2	0.7
	てはならない	0	0	3	1.0
	はずだ	0	0	1	0.3
	ばいい	0	0	1	0.3
	てほしい	0	0	1	0.3
	てもいい	0	0	0	0
	はずがない	0	0	0	0
	ではないか	1	6.2	0	0
	（し） そうだ	0	0	0	0
	みたいだ	0	0	0	0
	にちがいない	0	0	0	0
	わけではない	0	0	0	0
	わけにはいかない	0	0	0	0
	小計	1	6.2	71	23.5
思考動詞	考える系	0	0	71	23.5
	思う系	10	62.5	89	29.5
	小計	10	62.5	160	53.0
立場表明	賛成する/賛成だ	1	6.2	12	4.0
	反対する/反対だ	0	0	2	0.7
	～の立場である/立場をとる	0	0	2	0.7
	小計	1	6.2	16	5.3
総計		12	75.0	247	81.8
全主張数		16	100.0	302	100.0

表5によれば、モダリティ、思考動詞、立場表明の使用について、VNは全主張の75.0%、JPは81.8%であり、JPの割合のほうが高いとみられる。VNは「モダリティ」と「考える系」をあまり使用しないと見られる。また、伊集院（2012）の先行研究と同様に、「JPの「主張」の文末は学習者に比してモダリティ表現の使用が多く、個別の言語形式では「だろう」と「考える系」の使用が目立つ。一方、学習者は「思う系」の使用が顕著である、その他の言語形式の使用はあまりみられなかった」。文末形式は上級学習者であっても習得が難しいと言われているため、この結果は想定外ではなかった。

続いて、特に使用される「思う系」については、VNは「思う」を多用すると言える。これは、韓国人学習者と台湾学習者と同様である（伊集院 2012）。同一の「思う」の多用については表現が貧困で客観性が低くなりやすい。伊集院（2017）は、「よい作文」に関して、同

じ文末表現を連続使用する場合、評価が低得点であり、高得点が得られるには、効果的に様々な文末形式を使用するのが必要だと述べている。

また、木戸（2007、p.6）は「「私は」に相当する「私の意見では」「筆者は」と「と思う」がともに用いられることにより、「客観的表現」としての意見の度合いが低くなっている」と指摘している。次の例はベトナム人学習者の書いた「客観的表現」としての意見の度合いが低い例である。

(1) しかし、**私の意見では**、紙の新聞・雑誌がまだ必要**だと思います**。

(2) **私にとって**インターネットがどこまで普及しても、オンライン新聞がどこまで発展しても生活には新聞や雑誌が必要な**ものだと思います**。

このように、「思う」を使用する際に、「私の意見では」「筆者は」などは不要という指導も必要があろう。

5. おわりに

本研究では、ベトナム人学習者が執筆した日本語意見文と日本語母語話者による意見文を比較し、文章構造と主張の述べ方について考察した。その結果、次のようなことが明らかになった。

(1) VN は、特定の文章構成がみられなかった。

(2) VN の意見文では、「背景的情報→主張→根拠→主張」という流れを使用するものが一般的であった。

(3) VN は「はじめ」の第1文を常に「背景」で開始する。

(4) VN と JP は両者とも「おわり」に主張を置くのは顕著的である。しかし、VN は、つねに「おわり」の第1文に主張を述べる、JP は「おわり」の末尾の文に主張を述べることが多い。

(5) 「主張」には、VN は「思う系」の使用が基本である。よりよい文章を書くために、「思う」の多用の代わりに、モダリティー、多様な思考動詞（考えるなど）、客観性を持つ受身形（思われる、考えられるなど）を使用する指導が必要である。

本研究では、文章対象としたデータが少ないのは限定としている。今後、さらにデータを増やし、考察する必要がある。また、文章の論理展開、表現の使用は母語の干渉に影響されることを証明するために、ベトナム人学習者が同じ内容を母語で執筆した意見文を収集し、分析を行いたい。

今回は、文章構造と主張の述べ方について検討したが、日本母語話者とベトナム人学習者の作文に他の相違点が存在する可能性があるため、より多角的に検討したい。

使用データベース

伊集院郁子（2011）「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベース」

参考文献

- 伊集院郁子・高橋圭子（2012）「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文の構造的特徴－『主張』に着目して－」『東京外国語大学国際日本研究センター日本語・日本学研究』2, pp. 1-16
- 伊集院郁子（2017）「作文と評価-日本語教育的観点から見たよい文章」『文章を科学する』ひつじ書房
- 国際交流基金（2020）『海外の日本語教育の現状 2018 年度日本語教育機関調査』, pp. 38-57
<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/survey18.html>（2022 年 2 月 3 日閲覧）
- Lee 風子（2006）「留学生の書く日本語意見文の分析－日本人学生との比較において－」『立命館法学別冊 山口幸二教授退職記念論集』, pp. 399-412
- 木戸光子（2007）「作文における「客観的表現」－上級日本語学習者の作文の分析を通して－」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』22, pp. 1-10
- 佐々木泰子（2001）「課題に基づく意見の述べ方－日本人大学生の場合・日本語学習者の場合－」『日本語教育のためのアジア諸言語の対訳作文データの収集とコーパスの構築』平成 11 年度～12 年度科学研究費補助金基盤研究（B）（2）研究成果報告書（課題番号 11691041）, pp. 219-230
- 田中真理・阿部新（2014）『Good Writing へのパスポート-読み手と構成を意識した日本語ライティング』くろしお出版

日本文学翻訳における翻訳シフト —三島由紀夫「仮面の告白」露訳を中心に—

イスマイロフ カミル (ISMAILOV Kamil)
(ウズベキスタン・ウズベキスタン国立世界言語大学)

1. はじめに

文学作品の翻訳においては可能な限り原文に等しい意味を持ち、等しい印象を与える一方、起点言語での可読性が高く、文学性を保った翻訳文が求められている。しかし、いかなる翻訳方法を用いても完全に等価的な翻訳に達することはありえないと考えられている。そして日本文学は日本が独自の文化を展開してきた経緯を受け、他言語に翻訳される際は更に特有の配慮が必要だと言える。

三島由紀夫は日本が誇る文豪であり、世界で最も翻訳されている日本作家の一人である。したがって、彼の多くの作品は既に翻訳研究の対象になっている。しかし、三島由紀夫の名著、「仮面の告白」（1949）という長編小説はこれまで翻訳学の視点から研究されていない。

自伝的小説と見なされている「仮面の告白」は多数の言語に翻訳されており、三島文学の不可欠な要素である。唯美的な作風で書かれており、巧妙な言葉遣い、比喩が多様であるので、言語学的な観点からも非常に興味深い研究対象と言えよう。そこで、「仮面の告白」の、日本語原文からロシア語への翻訳に焦点をあて、そこに見られる翻訳シフト、平たく言えばズレを考察していきたいと考えている。

本研究では翻訳の在り方についての考察を踏まえつつ、三島由紀夫「仮面の告白」の原文とグリゴリー・チハルティシヴィリによるロシア語訳を比較し、翻訳に際してどのようなズレが生じたか及びその理由を明らかにし、可能な限り改善例を提示することを目的とする。本研究の成果を、今後、日本文学のロシア語訳における等価性を上昇させる具体的な方法を見出す研究に活用し、さしあたっては三島由紀夫の「仮面の告白」の新訳を作成したい。

2. 先行研究

本章では、翻訳学に関する先行研究を示し、本研究で行われた比較分析と考察の根拠となる基礎知識について述べる。

一先ず翻訳の定義を示しておく必要がある。世界大百科事典によると「翻訳とは、ある自然言語の語・句・文・テキストの意味・内容をできるだけ損なうことなく他の自然言語のそれらに移し換えること」である。しかし、実際に等価的な、つまり原文と同等な意味を持ちつつ、同等な印象を与える翻訳文を作成することは、起点言語と目的言語の特徴にもよるが、非常に困難、あるいは不可能だと考えられている。それに関して、寺浦（2021： 280）は「翻訳可能性に挑むことは、新たな文学作品を生み出すことと同義である」と書いている。しかし、ある翻訳者は等価性を優先せず、原文を損なうことなく伝える観点上で誤訳であると意識しつつ、避けられないものではなくても、自らの創造性を加えることで原文の内容を変えてしまう場合もあるのではないかとと思われる。寺浦（2021： 280）はそれは故意ではないであろうと指摘し

ているが、寺浦は飽く迄も「金閣寺」と「春の雪」の英訳しか検討していないので、他の言語訳も考慮に入れる必要があると思われる。今回の分析の結果に基づき、それらについて考察することは本研究の最終的な目標の一つである。

次に、翻訳行為で扱われる方法、翻訳方略を見ていきたい。現在のところ翻訳方略の分類は多数存在しているが、本研究では翻訳学の基礎中の基礎とも言えるヴィネイとダルベルネ（1958）の一般翻訳方略を挙げたい。

表 1 一般翻訳方略

直接的 翻 訳	1) 借用	三味線→сямисэн
	2) 語義借用	成人の日→День совершеннолетия
	3) 直訳	Хорошего дня→良い一日を
間 接 的 翻 訳	4) 転位	彼女はよく泣くんだ→она плакса
	5) 調整	Это будет стоить недёшево→これは高くつくよ
	6) 等価	足が出る→превысить бюджет
	7) 翻案	御神籤→гадалка, колдун

表 1 の通り、翻訳方略は大きく直接的翻訳と間接的翻訳に分けられており、7つの方略からなっている。直接的翻訳は原文を保つ翻訳である。1) の借用は原文の音を保ったまま移し換える方法である。2) は起点言語の表現や構造だけをそのまま移すことである。表現の構造を変えずに移すが、日本語にある文化的な背景が分らないと意味が伝わらない。この2つの方略は目標文化にないものを維持したまま移すために使われる。もう一つの直接的翻訳方略は3) 直訳、すなわち逐語訳である。起点言語の言葉を目標言語にある同等の言葉に変えることである。直訳は最も等価性の高い方略とされているが、直訳が不可能、若しくは直訳で文がおかしくなり、違和感を感じさせる場合は間接的翻訳を行う。間接的翻訳では転位、調整、等価、翻案という方略が用いられる。4) 転位とは語句の意味を保ち、品詞のみを変えることである。例えば、起点言語の「彼女はよく泣くんだ」の泣くという動詞を目標言語のよく泣く人を指す名詞「плакса」に変える。5) は調整、直訳の場合に目標言語では不適切であり、不自然に聞こえるため、起点言語の意味や視点を変えることである。例えば、「это будет стоить недёшево」を直訳すると「これは安くなくつく」になるため、「これは高くつくよ」というふうに視点を変える。6) 等価は、一般的に広まっている「等価」とは少し異なり、ヴィネイとダルベルネが示した「等価」は、起点言語と目標言語が同一の状況を異なった文体・構造で伝える手段である。慣用句及び諺を翻訳する際よく用いられる。例えば、「足が出る」という慣用句を「превысить бюджет（予算を超える）」と訳す。7) は起点文化のある状況が目標文化には存在しない場合に文化的言及対象を変える手段である。例えば、日本の「御神籤」は

ロシア語の文化に存在しないから、「未来を占うもの」という印象を保持し、「гадалка（占い師）」に変える。

ヴィネイとダルベルネ（1958）はさらに、起点言語から目標言語への移行の際に従うべき 5 つの手順を指摘する。

- (1) 翻訳の単位を見つける。
- (2) 起点言語テキストを検討し、翻訳単位の記述的、情緒的、知的内容を考慮する。
- (3) メッセージのメタ言語的内容を再構築する。
- (4) 文体的効果を考慮する。
- (5) 目標テキストを作り、改訂する。

翻訳方略はほかにも多く存在するが、特に一般翻訳方略には入っていない加訳と減訳も示しておく必要があると思われる。加訳とは原文にない言葉を付け加え訳すことであり、減訳は原文にある言葉を省略し訳すことである。河原（2014: 123）によると、翻訳ストラテジーにおいては「また、隷属（2 つの言語体系の違いによる義務的な転位と調整）と、選択（翻訳者のスタイルや選好による非義務的な変更）」という重要なパラメーターが存在している。

どのような翻訳ストラテジーを使うのかは翻訳者の目的にもよる。そういう観点では、翻訳を起点言語寄りの翻訳と目標言語寄りの翻訳に分類することができる。本研究では「起点言語寄りの翻訳は等価性が高く、目標言語寄りの翻訳より望ましい」という定義を前提としたい。

3. 方法

本研究で用いた方法は文献調査と比較分析である。文献調査の段階では対象作品「仮面の告白」の原文とロシア語訳を精読し、次に日本文学（主に三島由紀夫の作品）の翻訳と翻訳行為自体に関する先行研究を検討した。

その次に比較分析を行った。作品全体を分析することは困難であると判断し、分析の対象を本作の原文とロシア語訳の 1 章に絞った。分析単位としては原文とそれに相当する翻訳文の段落を特定した。合計 88 段落からなっている。分析単位の選択は、段落は文よりもまとまった考えを表し、文脈が分かる文章の塊だからである。本研究では翻訳文は原文の全体的な印象を保っているかを重視したいので、文構造が多少変更されているとしても、全体的な印象及び文脈を損なわない限り、ずれとして検討していない。以下では分析の具体的な手順を示したい。

1. 各単位が与える全体的な印象を比較した。
2. チハルティシヴィリによる翻訳文を日本語に逆翻訳した。
3. 原文及びチハルティシヴィリによる翻訳文を筆者による逆翻訳と併せ文構造、語順、強調部分を比較した。（加訳・減訳の有無も検討）
4. 語彙的な等価性を検討した。
5. 以上の段階を踏まえ、可能な限り翻訳シフトがある部分の改善例の提示を試みた。（主に翻訳者のスタイルや選好による非義務的な変更）

4. 結果と考察

本章では、上述の比較分析を通じて得られた結果を考察していきたい。分析を行った結果、分析対象の 88 段落のうち、52 段落の中で顕著なずれを発見した。以下では筆者が選抜した最も代表的な事例を見ていきたい。

例 1 (31)

- お坊ちゃま、この絵のお話御存知？
- しらないの
- この人男みたいでしょう。でも女なんですよ、本当は。女が男のなりをして戦争へ行ってお国のためにつくしたお話ですのよ。

例 1 は女中とご主人の子の会話である。ここでは女中の言葉遣いに注目したい。女中が子供に対して敬語を用いることによって二人の関係性が明らかになり、日本の女中のイメージが作られている。以下ではその翻訳を見ていきたい。

ロシア語訳 (チハルティシヴィリ)

- А ты знаешь, кто тут изображен?
- Нет.
- Наверное, ты думаешь, это - мужчина? А вот и нет, это - женщина. Она переделалась в мужской наряд и отправилась воевать, чтобы спасти свою страну.

逆翻訳 (筆者)

- 君、この人は誰だか知ってる？
- いいえ。
- これは男の人だと思ってるでしょ？でも違う、女だよ。お国を救うため、男の服装を着て戦争しに行ったのよ。

翻訳文は敬語が欠けているのみで全体的な印象が著しく変わっていることが分かる。その理由としてはロシア語には日本語に相当する敬語は存在しないということが考えられる。しかし、多少工夫を加えることで、日本語の丁寧語と似たような印象を与える言葉に換え、翻訳文の等価性を上げることは可能である。以下では筆者による改善例をみていきたい。

改善例 (筆者)

- А знаете ли вы историю этой картины, юный господин?

- Не знаю.
- Этот человек, верно, походит на мужчину, не правда ли? Но на самом деле это женщина!
Эта история о том, как женщина, притворившись мужчиной, отправилась на войну, и отдала все свои силы служению родине.

改善例の逆翻訳（筆者）

- 若旦那、この絵のお話を知っているでしょうか？
- 知らないの
- この人は男みたいでしょうね。でも本当は女なんですよ。女が男に成りすまして戦争へ行って、お国のために全力を尽くしたお話です。

ここでは等価の方略を用い、「ご主人の息子に対して用いる尊称」という状況を持つ「お坊ちゃん」をロシア語において同じような状況を持つ «юный господин»（若旦那）に置き換えた。そして「若旦那」に対する代名詞と動詞を複数形に換え、翻訳文の丁寧さの度合いを引き上げた。それに加え、直訳を用いることができるところでは直訳を用いることで、グリゴリー・チハルティシヴィリによる単純化しすぎて、文学性が欠けてしまうように感じる翻訳文より等価的な等価的な翻訳になるのではないかと考える。

例 2（41）

私が幼時から人生に対して抱いていた観念は、アウグスティヌス風な予定説の線を外れることがたえてなかった。いくたびとなく無益な迷いが私を苦しめ、今もなお苦しめつづけているものの、この迷いをも一種の墮罪の誘惑と考えれば、私の決定論にゆるぎはなかった。

ロシア語訳（チハルティシヴィリ）

С ранних лет мое отношение к человеческой жизни полностью совпадало с августинианским постулатом предопределенности. Несмотря на все бессмысленные, тщетные сомнения - а они продолжают терзать меня и поныне, - я ни разу не отклонился от своего детерминизма, почитая любые колебания за духовный соблазн.

逆翻訳（筆者）

幼いころから私の、人生に対する考え方はアウグスティヌス風の予定説と全く一致していた。今も私を苦しめつづけている無益な空しい迷いにもかかわらず、いかなる躊躇いも精神的な誘惑と考え、私は一度も自分の決定論から外れたことはない。

この事例では翻訳文がシンプル化されているのに対して、逆に複雑で、読みにくくなっている。「予定説の線を外れることがたえてなかった」という語句は「全く一致していた」になっており、単純化され、文学性が損なわれていると考えられる。翻訳文全体ではそういう単純化の傾向が見られるが、その理由は明らかになっていない。仮説としては、目的文化の読者が三島由紀夫の複雑な文学作品をもっと理解しやすくするためであると考えられる。しかし、その複雑さこそが三島文学の魅力の一つであるから、その魅力を欠くほどであるなら、わざわざ三島由紀夫の作品を易しくする必要はないと思われる。

そして文構造が変わっていることで、文の強調されている部分も変わっており、全体的な印象にも影響を及ぼしている。以下では筆者が提示した改善例をみていきたい。

改善例（筆者）

С ранних лет мои представления о человеческой жизни неуклонно придерживались августиинанского постулата предопределенности. Снова и снова меня терзали бессмысленные, тщетные сомнения - они продолжают терзать меня и поныне, - однако рассматривая эти колебания как своего рода греховный соблазн, можно сказать, что детерминизм мой был незыблем.

改善例の逆翻訳（筆者）

幼時から私の人生観はアウグスティヌス風の予定説に外れることなく従っていた。幾度も幾度も無益で、むなしい迷いが私を苦しめ、今も苦しめつづけているが、この迷いを一種の墮落の誘惑と考えれば、私の決定論にゆるぎはなかったと言えよう。

ここでは調整の方略を用い、「線を外れることがたえてなかった」という語句の視点を少し変え、「неуклонно придерживались」（外れることなく従っていた）と訳したことで、ロシア語で適切でありつつ、原文の言葉遣いに近い翻訳ができた。次の文は可能な限り直訳を用い、文構造を保持したが、目的言語ではより自然に聞こえるためには加訳を用いて«можно сказать»（と言えよう）を加えた。

例 3

こけおどかしの鉄の門や前庭や場末の礼拝堂ほどにひろい洋間などのる…（中略）…威丈高な家だった。

ロシア語訳(チハルティシヴィリ)

Вид он имел довольно заносчивый и нелепый: помпезные железные ворота, широкие газоны, гостиная размером с буддийский храм.

逆翻訳 (筆者)

物々しい鉄の門、広い芝生、お寺ほどに大きい居間などがあって、どちらかというとき威丈高で、不釣り合いな感じだった。

この事例では原文の「礼拝堂」とその誤訳 «буддийский храм» (お寺) に注目したい。世界大百科事典によると、「礼拝堂」は祈る場所を指す言葉であり、特定の宗教のものではない。しかし、グリゴリーチハルティシヴィリによる翻訳文では仏教の「お寺」と特定されている。その理由としては翻訳者が和風の雰囲気を与えようとしたことが挙げられる。それは明らかな誤解であり、原文のもとの印象を変えてしまうと思われる。誤解である証拠は「洋間」という言葉にある。「洋間」とは洋風の部屋であり、仏教の「お寺」に例えるのは非常に疑わしい。以下では筆者に改善例を示した。

改善例 (筆者)

Это был заносчивый, высокомерный дом с показательно-угрожающими железными воротами, садом и комнатами, просторными как пригородная часовня.

改善例の逆翻訳 (筆者)

こけおどしの鉄の門、前庭、場末の礼拝堂ほどに広い部屋がある傲慢で威丈高な家だった。

例 4 (32)

私は打ちひしがれた気持ちだった。彼だと信じていたものが彼女なのであった。(中略) それはとりわけ彼の死に対して私の抱いた甘い幻想への、残酷な復讐、人生で私が出逢った最初の「現実の復讐」に似ていた。

ロシア語訳(チハルティシヴィリ)

Я был сражен. Тот, кого я считал мужчиной, вдруг превратился в женщину. (сокр.)

Как долго и сладко мечтал я о гибели рыцаря, и вот такое жестокое разочарование! Это была первая месть реальности, испытанная мною в жизни.

逆翻訳（筆者）

私は驚いた。男だと思っていた人はつい女になっていた。（中略）
騎士の死をどれほど長く甘く夢見ていたことか、こんなにも残酷な失望はない！私が人生で初めて経験した現実の復讐だったのだ。

この事例で見られる翻訳シフトは同じく単純化と文構造の変更によるものであるが、二つ目の文は変更が著しく、ほぼ別の文になっている。一つ目の文では注目したい所は「彼」が「彼女」であったという「言葉遊び」である。翻訳文ではそれが単純化されているので、多少文学性が失われていると考えられる。以下ではそれらの修正を試みた。

改善例（筆者）

Я был подавлен. Тот, кого я убеждённо считал «им», оказался «ею». (сокр.)
Впервые в жизни я столкнулся с чем-то, походившим на «мечь реальности»: жестокой мостью моим сладким фантазиям о «его» смерти.

改善例の逆翻訳（筆者）

私は打ちひしがれた。彼だと信じていたものは、彼女なのであった。彼の死に対する私の甘い幻想への残酷な復讐、人生で初めて「現実の復讐」みたいなものに出逢った。

ここで1つ目の文の直訳を試みた結果、違和感がなかったので、作者の言葉遊びを保持することができた。2つ目の文も可能な限り直訳したが、義務的に文構造を変更する必要があった。

5. 結論

グリゴリーチハルティシヴィリは素晴らしい作家であり、優秀な日本学者である。彼が翻訳した『仮面の告白』は、文学性を持っており、明瞭で読みやすい。しかし、原文と比較すれば、多くの文章は非常に単純で、三島由紀夫の原文が持つ美学や独特の雰囲気をとくに伝えられていないと感じてしまう。著者の意図、技術、言葉遣いを十分に伝え、同時にロシア語で適切で可読性の高い翻訳を見つけることができず、多くのずれを縮めることができていない。異なる語族に属するロシア語と日本語の差は、言語のあらゆる面で現れてくる。それは特に文学の翻訳に際して明らかになるものであり、原文通りに翻訳することは不可能である場合が非常に多い。しかし、チハルティシヴィリの翻訳には、翻訳者の創造性にほかならない不当なず

れが存在しているのも事実である。翻訳者の誤解によってもずれが生じる可能性を除けない。グリゴリーチハルティシヴィリによる『仮面の告白』の翻訳は、翻訳者の創造性の要素が多数入っており、目的言語よりの翻訳に分類されることは間違いない。そこで、原文の詳細を重視した起点言語寄りの新たな翻訳の作成が必要と思われる。それは今後の研究の効果的さにもつながるので、非常に重要である。今後の課題としては、『仮面の告白』の新訳の作成とともに、日本文学のロシア語訳における翻訳文の等価性を上昇させる具体的な方法を見出す研究を行いたい。

参考文献

- アンダソヴァ・マラル「異言語間における言説分析—『源氏物語』 ロシア語訳の事例から」『物語研究』18 巻 pp. 158-174、2018
- 加藤周一『世界大百科事典』平凡社、2007
- 金子百合子「ロシア語と日本語における開始表現：三島由紀夫『金閣寺』を題材に」『Japanese Slavic and East European Studies』26 巻 pp. 91-119、2006
- 河合譲「日本文学翻訳の理論と実際：特に三島由紀夫『金閣寺』の英訳を中心として」『広島商大論集 商経編』7 巻 2 号 pp. 171-195、1967
- 河原清志「翻訳ストラテジー論の批判的考察」『翻訳研究への招待』第 12 号、pp. 121-140、2014
- 河原清志「翻訳シフトと翻訳者の意識／無意識に関する予備的考察」『金城学院大学論集. 人文科学編』13 巻 1 号 pp. 33-46、2016
- ジェラルド・ジュネット著、和泉涼一訳『スイユ：テキストから書物へ』水声社、2001
- ジョン・ベスター「翻訳者の立場から」『新潮』87 巻 12 号 pp. 239-242、1990
- 寺浦麻由「三島由紀夫文学の英語翻訳可能性と不可能性：『金閣寺』、『春の雪』を中心に」大阪大学大学院言語学研究化博士論文、2021
- 三島由紀夫『仮面の告白』新潮社、1949
- Jean Paul-Vinay, Jean Darbelnet. *Stylistique compare du français et de l'anglais, méthode de traduction*. Paris: Didier, 1958 (ヴィネイ、ダルベルネ『フランス語と英語における比較文体論、翻訳方法』パリ：ディディエ、1958)
- Mishima Yukio. *Confession of a mask*. Weatherby M. (Trans.). New-York: New Directions, 1958
- Юкио Мисима, перев. Григорий Чхартишвили. *Исповедь маски*. — Санкт-Петербург: Северо-Запад, 1994 (三島由紀夫著、グリゴリーチハルティシヴィリ訳『仮面の告白』サンクト・ペテルブルグ：ゼヴェロ・ザパッド、1994)

2021 年度 日本語・日本文化研修留学生

氏名	出身大学	受入教員
1 吳 倩儒 (NG See Yu Jenny)	UOW College Hong Kong (香港)	菅谷 奈津恵 教授 (高度教養教育・学生支援機構)
2 パク サンビン (PARK Sangbin)	水源大学 (大韓民国)	菅谷 奈津恵 教授 (高度教養教育・学生支援機構)
3 グエン ティエン ガー (NGUYEN Thien Nga)	ハノイ国家大学外国語大学 (ベトナム)	川口 幸大 教授 (文学部)
4 イスマイロフ カミル (ISMAILOV Kamil)	ウズベキスタン国立世界言語大学 (ウズベキスタン)	黒岩 卓 准教授 (文学部)

2021-2022 日本語・日本文化研修留学生報告書
日本語・日本文化レポート集

2022 年 9 月発行
東北大学高等教養教育・学生支援機構
言語・文化教育センター

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41
URL: <http://www.ihe.tohoku.ac.jp/SJLE/>